

---

# 魔法先生ネギま！ 黄昏の創造主

小波 小雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ 黄昏の創造主

### 【Nコード】

N5257T

### 【作者名】

小波 小雨

### 【あらすじ】

生まれた瞬間から悪魔と呼ばれ、英雄になり、化け物に成り果てた男の紡ぐ。

愛と友情の物語

注意…この主人公は頭がイカレています。不快に思われる方はスルー推奨です。

この作品では原作を投げ捨てる様な話になるかと思っています。

原作ファンの方は見ない方が宜しいかと・・・。

たぶんハーレムにはしないと思います。

## 序章（前書き）

始めましての方は始めましてです！

前の駄作を読んでもくださった方はお久しぶりです♪

今度こそ最後まで書けたらいいな〜と思います！

## 序章

いきなりだが、ここで一つ昔話をしよう。

俺が生まれたのは今で言う所のドイツ、当時は神聖ローマ帝国などと呼ばれていた場所だ。

当時は1000年戦争真っ只中で、その土地に生きている者の暮らしは酷いものだった。

俺が生まれた家系はそれなりの爵位を持っていたが、帝国からの搾取と戦争により貴族らしい暮らしが出来てはいなかった。

そんな中俺が生まれたのだが、当時にはあまり知られていなかったアルビノとして生を受けてしまった。

そして、運の悪い事に次男でもあった。

この時代では仕方が無かったのだろうが、生まれた瞬間から俺は悪魔の子と呼ばれ、そう育ってきていた。

コレは知るのが少し後になるが付けられた名は化け物だったしな。

生まれてから碌に外に出してもらえず、世話なども使用人がイヤイヤしている様な状態だった。

そんな俺に、姉だけはただの姉弟として接してくれていたのが唯一の救いだった。

姉は少々変わった人でいわゆる天然と呼んでいい性格だ。

両親や城の者らは、俺を見ると気味悪がって近づいて来ないのだが、姉はそんな物お構い無しに寄って来て抱き締めてくれたり、自分が習っていたものを俺に教えてくれていた。

まだ物心つき始めの俺には、姉のみが唯一の“人”としての性格形成をする為に必要な感情を与えてくれた人だ。

人は生まれた瞬間から人間になるのではない。

成長していく段階で、人間としての感情や常識といったものを自分で知り作っていくものだ。

子供の頃にまともな愛情・・・。

ましてや、人と扱われていないような環境では、成長した後は人の皮を被った何かだろう。

それが、豚なのか犬なのか、はたまた本当に悪魔なのか・・・。

正直、姉がいなければどう足掻こうと人の感情など俺に生まれなかっただろう。

そんな俺に転機が訪れたのは、俺が10を少し超えた時だった。

姉がどこかの国の貴族の下に嫁ぐ事になった。

それを聞いた俺は、どんな立場でもいいから自分を連れて行ってくれと頼み込んだ。

当然のことながら両親はいい顔をせず、無碍にしようと思っていた様だが、姉がこれを認めてくれ、俺を連れて行けないのなら嫁がな  
いと抵抗してくれた。

これには両親も動揺したようで、姉が嫁いで生まれる相手方の貴族との繋がりや俺の存在が相手方に与える影響とを考えたすえに、姉を嫁がせた場合の利益の方が高いと思った様でコレを認めたようだ。どうしても邪魔なら俺を処分してもいいなどと相手と約束した様だが、その貴族様は何が気に入ったのか俺を養子として引き取るとま  
で言ってくれた。

初めは姉へのご機嫌取りなんじゃないかと子供心に思っていたが、  
どうやら本当にこんな容姿の俺を愛してくれた。

だから俺はその愛に答えたくて必死に自分を磨き上げた。

知識、礼節、剣術、大よそ貴族の子供として必要な物を、言葉もま  
ともに話せないような状態から吸収しまくった。

そして、20になる頃には国の有名な騎士団の副団長にまで上り詰  
めた。

初めの頃は、新しい両親や姉夫婦も心配するがあまり、騎士団への  
所属を認めてくれなかった。

だが、俺のタダ飯になってなんの役にも立てないのでは血反吐はい  
て訓練や勉強した意味が無い。

という言葉で無理やり説得した。

そして、俺はやはり騎士団に所属しても忌避されていた。

ただ、戦場に出るたびに俺が所属した軍は勝つという噂が出始めてからは手のひら返したように俺に色々な部隊からの誘いがあった。

そんな中一際熱心に誘ってきたのがSilbernadel Hosiery『白銀騎士団』だった。

まあ、たぶん俺の見た目を使っていい広告塔にでもしようとしていたのだろう。

だが、それはそれで俺を愛してくれる家の為になるとも思ったのでそれを了解した。

結果、それは大成功だった。

俺が白銀騎士団に入ってから三年間負け無しの部隊として今や国の最強部隊などと言われてもいた。

だが、ソレと同時に勝てば勝つ程、俺と家族との距離を離れていた。

事実、この三年ほど家には帰れていなく、ほぼ手紙のみの交流になってしまっていた。

それでもただ愛してくれる家族の為と思って俺は敵を殺し続けた。

それが幸せを破壊する行為だと気付きもしないままに……。



それが起きたのは俺が24になった時だ。

国が俺を危険視し始めた。

俺はこの時もはや英雄と言っているほどの武功を上げていた。

だが、英雄と言うのは政治家には邪魔な存在でもある。

時には王の声にすら匹敵する程、民に影響を及ぼす英雄は自分の利権にしか興味の無い者達にとっては邪魔でしかない。

そして、それに気付いた時は全てが遅かった。

いつも通り敵国家の軍と相対していたが、その時の奴らはどうにもおかしかった。

こちらに攻めて来るものも、反撃に移ると取って返したように防御に回っていた。

その戦術は時間稼ぎと言う点では確かに有効だが、これではどちらもいつまで立っても勝負が着かない。

伏兵なり遊撃を使つての奇襲すら仕掛けてこない。

これは何か罠があると、思うことも出来たが俺は今までの勘でソレはないと思い一気に攻勢に出てコレを見事打ち破った。

終わってみれば呆気ないので、結局奴等が何を狙っていたのかは分からなかった。

だが、この敵の作戦は見事成功していた。

ソレを知ったのはいつも通りの勝利の祝杯を騎士団の連中と上げていた時だった。

国でクーデターが起きた。

その報告が来た時、その場所を聞いて耳を疑った。

何せソレは、俺の家の領だったのだから・・・。

急ぎ戻った時には全てが終わっていた。

クーデターを鎮圧する為に来ていた他の騎士団・・・。

俺の事を疎ましく思っていた連中だったのだが・・・。

そいつらは、俺の義理の両親を殺し、義理の兄を殺し、姉を拷問の末殺した。

特に姉の姿は見るに耐えない物になっていた。

何十人にも及ぶ陵辱の末、生かさず殺さずの拷問を受けたと一目で分かる様な状態だった。

この時、俺は完全に壊れた。

精神がこの光景を否定し、現実を否定し、俺がこいつ等と同じ生き物である事を否定した。

気が狂った俺は、その場にいた騎士団の連中を皆殺しにした。

当然そんな事をすれば俺は罪人になるが、その時はそんな事はどうでもよかった。

ただ一人でも多くの者を殺す為だけに剣を振るい、たった一人で騎士団を半壊させた末に囚われた。

その時に殺した数は数百名にも及び、なぜこんな事を出来たのか？という事も気にはならなかったし、この時精神が死んでしまっていた為どうでもよかった。

流石に国の英雄と言えどここまでの事をしてしまえばもはや助かる道は無いだろう。

恐らく、見せしめにでもされ公開処刑にでもかけられると、審問官より聞いていたが、ソレすらもどうでもよかった。

タダ俺は、もう自分を愛してくれる者はいないと言う現実を認め受け止める事に必死だった。

そして、一つの結論に至った頃にそいつは現れた。

そいつはローブで顔を隠し、気配がおかしな奴だった。

そいつは言った。

生きたいか？と、

だが俺はそれに否と答えた。

では、死にたいか？と聞いて来た。

確かに、ソレも考えてない訳ではないが、それでは、無様にも生き残った意味がない。

せめて、姉をあんな目に合わせた者共を皆殺しにしてからでなければ死ねはしない。そう答えると、

ならば、それが出来る力をやる。

などと言ってきた。

明らかに怪しい。だが、この時の俺にはそんな事はどうでもよかった。

だから、出来るのか？と聞いた。

ああ、出来る。つい最近ソレを完成させたばかりだよ。と答えた。

ならば、なんでもいい。どんな物になろうと俺は構わなかった。

だから俺はそいつの申し出を受けた。

そうすると奴は薄く笑い、コレは貸しだと言ってきた。返すまで勝手に死ぬなと言う呪を吐いて去っていった。

その日、俺が収容されていた場所から半径数キロに亘る俺以外の生

物が、俺を新生させる餌として捧げられ、その日の夜に俺は化け物になった。

それから、俺を嵌めた者を殺す日々だった。

そして数日もしない内に全てを殺し尽くした俺は国を出て宛てのない旅に出た。

そこからは酷いものだった。

あんな事をすれば当然俺は指名手配をされ、追われ続ける日々の始まりだった。

だが、人間がいくら束になろうと俺を殺す事はできない、追ってきた全てを皆殺しにしていくうちに、おかしい奴等が現れ始めた。

曰く、自分達は正義の魔法使いだと、お前の様な化け物は我々の敵だから退治すると、そして、そいつらは超常現象を起こし俺を攻撃してきた。

が、生憎ともはやこの身は奴等の言う通り化け物、ならばその程度で死んでやることは出来ない。

それに、恩人への貸しを返していないので、勝手に死ぬ事はしたくなかった。

だがそれでも、魔法使いは強力だった。

俺の弱点となる光や火などの魔法を使い撃ち滅ぼそうとする。

ならば、と。

俺はそれすらをも殺せる様に、より化け物になる為に自身の根源にある渴望で、自分だけのルールを創り世界に適合させた。

それは俺だけの祝詞じゅもん俺のみが使える俺だけのルール。

「ああ、日の光はいらない。

ならば、闇こそ我が世界。

闇に無敵となる魔人になりたい。

この畜生に染まる血を絞り出し、我を新生させる耽美と暴虐の化身――――

暗く染まれ――――

Schwarzer 闇のDemirg 創造主

瞬間世界が闇に染まり一切の光が消え失せた。

この中では生ける者は全ての例外なく屠殺する事が出来る。

引き込まれたが最後、この闇から逃れる術はない。

故に、こいつらに未来はなく、ココで俺に殺された。

なぜ、俺がここまで変質したのか？

などと聞かれると困るのだが、恐らくは俺が持つ稀有な体質にあつたのだろう。

通常男の染色体はXY、女がXX、だが稀に三倍体や四倍体などと呼ばれるものをもって生まれる事がある。

俺が持つそれはXXYと言う物だ、人における三倍体は欠陥者か、完璧な者であるらしい。

これは珍しいがそこまで特別な存在ではない。

だが、俺は奴の儀式により体を創り変えられた。

この時どういう変化が起こったのか分からないが、体細胞がES細胞で構成されるようになったらしい。

これがどういう事か分からないと言う者は調べてくれ。

事実のみを言えば、俺はコレにより体を.....でも出来る。

ES細胞とは無限に増殖し、ナンにでもなる事が出来る細胞の原形とでも思ってくれ。

つまり、科学的に限りなく神に近い存在になってしまった。

まあ、コレは科学が進歩してから調べた事だったんだが・・・。

そして、何にでもなれ、無限に増殖する細胞で体が構成されると言う事は限りなく不老不死に近い。

俺の得た能力と合わせれば、恐らく通常の方法では殺せないだろう。それこそ、俺に気付かれる事なく一瞬で何も残さないように消し飛ばしでもしない限りな。

まあ、長々と語ったが、コレが俺の始まりだ。

ここから先に何かあるのかは、またの機会に話そう。



## 序章（後書き）

ええ、いきなりディエス成分ぶち込みましたよ。

この主人公の見た目はベイっぽいですね。

でも、微妙にルーミア成分も含んだ感じですよ。

後、こやつよく性転換します。その場合性格がずいぶん違います。

ベイの見た目で女とか・・・と思われる方は上手く自分の中で帳尻合わせてください・・・。

まあ、女化している時はEXルーミアの白髪でも構いません。

ああ、でもベイより刑士郎の方がいいのか？

後、ES細胞云々はラノベのレベリオンを参考にしています。

この設定出すのはそれなりの理由も考えています。

後、独自考察と言うか、

エヴァの真祖化の魔法？ですか？それは肉体から魂を抜いて肉体のみを新生させるモノなんですよね？

だったら、癌のように全く違うモノが生まれる事もあるのでは？という事でこの設定を使わせていただきました。

後、設定だけだと無敵臭がしますが、そこまで強くないですよ？

ただ、無詠唱で闇の中に引きずり込める事が出来るので暗殺という観点で見れば最強かもですね。

鳥や虫になって近づき闇の中へポイすれば勝ちです。

ガチバトルだと、この序章の段階で殺し合いの時のナギくらいですね。

少なくとも人間の時に英雄足り得る戦火上げている人です。

ですので、条件揃えば普通に死にます。

ああ、人間の時どうしてそこまで強かったのかは、本人の努力もあります。元々天才だった為ですね。これは三倍体云々の設定で説明は付くかと。

ただ、まともな愛情を貰えるのが姉のみで逢う時間も一週間に数時間程度という環境、ソレに加え。

犬猫を飼う様な感覚で10まで育てられた状態でしたので、本人の天才性が発揮されたのはそれ以降、第二成長期突入まじかの段階です。

後、闇に引きずり込むだけでは能が無いのでルーミアの能力の上位概念としています。

まだ使い切れていけませんのでムーライトレイブツパとかは出来ませ

ん。

それと、この主人公は自分自身が媒体になれるので詠唱や杖とか要りませんね。

ただ、そんな気分の際は何かブツクサ言う可能性があります。

今の所はこのくらいですかね。

後は追々捏造していきましょう。

どこかで矛盾炸裂するかもしれませんが、その時は感想で指摘してください。

## この出逢いに福音を

おや、また俺の昔話を聞きに来たのか？

物好きだね。

まあ、いい。聞きたいと言うのなら聞かせよう。

アレは・・・、そう俺が化け物になって100年くらいした頃だったか。

俺は魔法使い共の間で、男の姿の時は『<sup>タナトス</sup>常闇の死』女の姿の時は『<sup>ニュクス</sup>常闇の女神』と呼ばれていた。

どうでもいいが、やけに陳腐な渾名だ・・・。冥府の番人に夜の女神とは・・・。

でも、ニュクスの方はある意味的を得ているな。

この時代ではまあ、大体は元の姿で活動していたし、気分によって女の姿にもなって追跡者で遊んでたのが悪いのだろうが・・・。

前に話した通り俺は三倍体だから精神の主軸は男だが、女の面もある。

だから、そういう気分の時は体を変えていた。

魔力も使わず好き勝手に姿を変えられるから便利なんだがあまりに

も自分から離れた姿になるとあまり精神的によくないので、ほとんどはそのままでいる事が多い。

だが、色白で白髪、赤目と言うのは目立ちすぎるので色などは仕方なく変えたりもしている。

まあ、そんなこんなで100年位した頃アイツに出逢った。

体を女に変え、金髪碧眼にして町をぶらついていると

「おい！魔女の処刑だによ！」

などと聞こえてきた。

この時代、魔女狩りの全盛期だった為、特に珍しくはないけれど、たまたま通りかかったのも何かの縁だと思い、本物なら助けようかな。

とか思いながら向かうと、そこには金髪の人形の様な少女が貼り付けにされていた。

俺は一目見て、ソレが自分と同じ魔の存在だと思った。

なので・・・

《ねえ、その貼り付けにされている哀れなよう・・・少女、助かりたいかしら？》

念話で話しかけるとその少女はビクッとして辺りを見回していた。

《無駄よ、今の弱った貴女じゃ見つけれないわ。それで、先ほどの問いに答えてくれないかしら？ ああ、もしかして念話する魔力すらないのかしら？ もしそうなら三回瞬きしてからうなずいて》  
そう言う少女は指示通りの行動をした。

《そう、それじゃ。先ほどの提案に受けるなら瞬き一回の後うなずいて。否なら首を振ってくれればいいわ》

そう言う少女は、うなずいた。

《そう、ならば・・・》

「闇に染まれ」

ただ一言そう呟いただけで、処刑の為の広場は全て闇に沈んだ。

そして、少女を助け出した後、闇の中の生物を全て圧殺した。

「さすが、下種の血。不味いわね・・・」

闇の中で爆ぜた肉体から出る血を闇越しに吸っていると

「助けてくれたのはありがたいが、貴様何者だ？ それと、いい加減降ろせ」

いわゆる、お姫様抱っこで運んで助け出してそのままにしていたようだ。

「あら、マトモに立てるのかしら？」

降ろしつつ言う。

「ふん、この・・・ていど！」

ふらついたのが恥ずかしかったのか、強がったせいで語尾が上がっていた。

「・・・まあ、いいわ。それで、私が何者か、だったかしら？  
そうね・・・。私は貴女の同類よ。とある、奴に呪を貰って気付けばこんなザマよ。こう見えて100歳超えてるしね。ソレよりこんな場所で悠長に話している訳にもいかないでしょうから移動しましょう？」

そう言いつつ、広場から町を出る為に歩き出す。

「今サラッと流せない事を・・・って、お、おい！ そんなに速く歩くな！」

どうやら相当弱っている様だ・・・。フラフラしながら必死に俺を追ってきている。

「だから大丈夫かと聞いたのに・・・」

呆れつつ少女に近づき抱き上げる。

「あ、おい！ わ、私は大丈夫だ！」

顔を少し赤くして反論するが・・・、

「その貴様待て！」

「その吸血鬼をこちらに寄越せ！」

などと自称正義の魔法使い殿が言ってきたので

「あら……。この様な少女を寄って集って……。大の男が  
することじゃないわね」

と、気だるげかつ妖艶に笑いながら言う。

「わ、我々は正義の為にその者を捕まえ退治しなければならない！」  
とか

「貴様！ 邪魔立てするなら容赦はしないぞ！」

などと言いつつ、その顔は下卑た笑みが浮かんでいた。

（お、おい！ どうするんだ！）

小声で少女が聞いて来た。

「どうもしないわ。この程度ならお話にならない。さっきの私の魔法にすら気付いていないし、認識障害をレジストすら出来ない様な者に負ける道理はないわ」

妖艶な笑みをさらに淫靡いんぴに深めながら答える。

「貴様……。何者だ？」





今まで殺してきた連中と同じような反応をする。

「つまらないわね。その反応は飽きたわ。もう少しバラエティーに富んだ反応してくれないかしら。毎回毎回その反応じゃこちらと同じ反応を返すしかないじゃない」

心底どうでもよさそうに言いながら。

「なら、口より体を、剣を取り見事打ち倒してみなさい」

いつもの様に宣言をする。

「つく！ やるぞ！」

「「「「「おう！」「」「」」」」

陣形を組み、前衛と後衛に別れ前衛は剣を取り、後衛は詠唱に入った。

「どうでもいいけれど……。貴方達が使っている魔法って……。酷く程度が低いわよね」

何のモーションもせずに闇を走らせ、相手全員を一気に飲み込む。

「ほら、そんな程度では相手にならない」

詰まらなさそうに呟いて、少女を見る。

「ほら、大丈夫だったでしょ？」

と、微笑みかける。

「い、今のがお前の魔法なのか？」

少しビクつきながらそう聞いてくる。

「ええ、そうよ。　と言っても私しか恐らく使えないでしょうけれど・・・。　私の変質はそう言うもののよ。　じゃあ、行きましようか」

「それはどう言う・・・。　っておい！　話の続きを！」

「だから、こんな場所じゃ落ち着けないでしょ」

呆れつつ言い聞かせてそれ以降は全て黙殺して移動する。

転移を使ってもいいけれど、近場なら飛んだ方が追跡しづらいので羽を生やして飛んでいくことにする。

「な、お前羽があるのか・・・」

「いえ、今生やしたのよ」

「・・・。　いい加減説明を求めたいのだが」

「待って、もう少しで着くから」

あの町に寄る際闇の中から出して森に隠しておいた小屋に向かって飛び

「着いたわ」

「前にこの森を通った時にはこんな小屋は無かったはずだが、お前が建てたのか？」

「いいえ、ある所で盗んできたのを闇の中にしまっていてね、何か有った時の為に一応出しておいたのよ」

席を勧め、お茶の用意をしながら答える。

「小屋とはいえコレだけの物を丸々しまえるのか・・・」

「貴女は出来ないの？」

不思議そうにそう答え

「・・・。私はどちらかと言うと氷の属性が得意なのだ・・・。それに、明らかに私が知る魔法を超えている」

少女は呆れつつそう言って来る。

「そうかしら・・・。どうぞ。まあ、私はかなり特別なのでしょよね。結局アイツが私に掛けた術がどういう物なのか聞かなかったしね」

用意したお茶を勧めながら答える。

「術を掛けられたと・・・？　そ、そいつはどんな奴だった！」  
いきなり興奮して聞いてくる少女。

「な、なに？　どうしたの？」

「いいから答えろ！」

「……。ローブ被ってたから顔は分からないし、男か女かすらも分からないわ。ただ、私に掛ける時、つい先日完成したばかりとか言ってたわね……。まさか」

そんな偶然無いだろうと思いつつ少女の方を窺ってみると

「……。どうだろうな。だが、私にこの魔法を掛けた者は私の手で殺したよ」

自嘲するようにそう呟く少女。

「そう、なら違う奴ね。私にこの術を掛けた奴は恐らく今の私かそれ以上の強さだったもの」

「それは本当か？」

「ええ、あれは次元が違ったわね。人間だった時で初めて敵わな  
いと思っただわ」

「お前が人間だった時は何を？」

「英雄をしていたわ」

「……。英雄だと？」

「そう。 まあ、そのせいで家族をクズに殺されたのだけど・・・」  
薄笑いをしながら言う。

「すまない・・・」

「まあ、世の中ではこの程度よくある話よ。 それに、そいつらは残らず私自らの手で殺しつくしたからこの件についてはいいのよ」  
そう言いながら微笑む。

「そうか・・・」

「ソレより、いい加減自己紹介しましょう？ 何時までも貴女とかお前では締まらないわ」

「それもそうだな。 私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ」

「私は、ライル・？・フォン・エーデンヴルグよ」

さらっと流す様に言うと

「な、な！？ ライルで、英雄・・・。 お前、アノ白騎士か!？」

もはや、俺としては忌み名みたいな称号なのだが、それは・・・。

「あゝ、貴女あの時代の人だったのね・・・。 じゃあ、たいして生まれた時代変わらなさそうね」

他の話題にシフトしようとするが

「ま、待て！ サラツと流すな！ 私は確かにあの時代の人間だ！  
だからこそ、そのお前がなぜ……っ！ そうか……、英雄の  
反逆には訳があったと言う事か……」

何かに気付き途中までの興奮が一気に冷めた様だ。

「まあ、色々あったのは事実ね……。さて、シケタ話しても仕  
様が無いわ。それより……。エヴァでいいかしら？」

「あ、ああ。それで構わない。私はライルと呼ぼう。それで、  
なんだ？」

一応落ち着きを取り戻した様子のエヴァ。

「エヴァはこれからどうするの？ よかったら暫く一緒にいない？  
私もいい加減一人の生活に飽き飽きして来たのよね」

「そう……だな。私も流石に一人は辛くなって来た所だよ。い  
いだろう、ライルがどうしても言うなら一緒にいてやらないこと  
もないぞ！」

強がって言うてはいるが、エヴァの目は寂しくて仕様が無いと訴え  
ていた。

「ふふふ、そうね。じゃあ、今日からは良き友人として共に」

お茶の入ったカップを掲げながら言う。

「あ、ああ！　どうせコレからは長い付き合いになるだろうしな」

エヴァもカップを持ち上げてカチンと打ち合わせて言う。

コレが俺と彼女の出逢いだった。

エヴァの宣言どおりとても長い付き合いになってしまふ訳だが、この時はただこの出逢いを祝福と思い二人して喜んでいただけだったな。

「ところでライル、私が知っているライルという英雄は男のはずなんだが？」

ああ、そのことか。

「それねー、私気分によって男と女になれるのよ、タナトスって聞いた事ある？」

「な！？　では、あれは二人いたのではなく・・・」

「そう、両方私よ。　ほら、この通り男になれる」

男の姿に戻りながら言う。

「幻術ではないのか？」

「違う、俺の変質はそういうものみたいだ、憶測でしかないがベースとなっているのは吸血鬼化の儀式なのだろうが、何故か俺は吸血鬼よりも闇の色が濃い。　常闇の妖魔と言ったところか・・・。　体も何故か自由自在に変えられるしな」



「なんだそれは！ 私なんかずっとこのなりなんだぞ！ ずるい！」  
いや、そんな事で逆上されても仕様が無いのだが・・・。

「まあ、それはそれでいいんじゃないか？ そのての趣味の奴には  
モテ放題だろう」

まあ、俺はそういう趣味は無いがな。

「つく！ そんな奴等に言い寄られても迷惑だ！」

それはそうか。

「諦めろ、嘆いてもどうにもならん」

「わ、分かってる・・・」

「さて、エヴァ今日はもう寝よう。 幸いここの寝床は二つある」

「それもそうだな・・・。 では、おやすみライル」

「ああ、オヤスミ。 エヴァ」

恐らく、この出逢いが全ての始まりになるのだろう。

確かに、俺が変質した事は俺の化け物としての始まりではあったが、  
エヴァと出逢い共に生きる、そう。

俺は、エヴァに逢うまで生きていなかった。 もちろん生物学的に

は生きていたが、生を謳歌してはいなかっただろう。思うに、化け物が少し人間性を取り戻すきっかけだったのだろう。

この出逢い無ければ物語として成立する事はなかったな。化け物がただ餌を求めて彷徨いどこかでたれ死んでいただけの生だった。

だから、この出逢いに心からの祝福を。しかし、エヴァンジェリンか……。今思うに、まさに福音だな。

## この出逢いに福音を（後書き）

この時のエヴァの魔法知識はソレほどなかったのでは？　と思いいこの様な会話になっています。　因みに主人公は人間の魔法も使えない事はないですが、妖精を使役すると言うより、脅して使っている様な状態なのでそこまで精度はよくないです。

## 今後の方針

翌日俺が目覚めると隣にエヴァが寝ていた。

どう見ても幼子としか言えない容姿のまま時を止められた彼女。百年もの間この容姿で過し誰一人頼る事が出来ない生活というのは想像を絶する辛さがあつたのだろう。

そして、とうとう捕まり処刑されかけた。その時の心情はどうだったのだろうか？ 安堵？はたまたまだ生き足掻きたい？ やつとここで辛い生活から開放される安堵。自分はまだ生きたい、生きて・・・せめて人並みの幸福を手にしたい。どちらでもありどちらでもない様な気はするな・・・。

まあ、ソレを救い。そして、同じ様な境遇の俺に対して安らぎにも似た感情を抱くのは必然かな。

彼女の生に影響を与えてしまった俺はそれなりにソレを守る義務があるのだろうか・・・。だが、俺は果たして彼女の安住足り得るのだろうか？ 自分に人としての生き方を教えてくれた姉や義兄、義理の両親を不幸・・・いや、絶望のどん底の内に死なせてしまった俺などに・・・。

だが、今にも処刑されそうになっている彼女の瞳を見た時に昔の自分を重ねてしまい思わず話しかけてしまった事には後悔してないがな。

そんなとりとめもない事を考えつつ寝ている彼女の頭を撫でている

と、くすぐったかったのか目を覚ましてしまった様だ。

「ん・・・うん？ お前は・・・」

「すまない、起してしまった様だな。 取り合えずおはようエヴァ」

なるべく優しくなる様に微笑みつつエヴァに挨拶をする。

「え？ あ、ああオハヨウ・・・。 って！ 何故ライルが私の寝床に！？」

寝ぼけていた頭が一気に覚めたような様子で毛布を跳ね除けつつ飛び退くエヴァに

「何故・・・と問いたいのには寧ろ俺なのだがな。 まあ、何となく理由は分かるから言わなくてもいいぞエヴァ」

少しイタズラっぽい笑みでそう言ってやる。

「ば、バカ！ ち、違うからな！ べ、別に寂しくなって人肌恋しかった訳では・・・ッは！」

顔を真っ赤にして何やら言い訳を並べた末に自爆しているエヴァ。

「自爆お疲れ様。 そんな事よりも「そんな事って何だ！ 違うんだからな！」・・・。 まあ、そう言う事にしておこう。 話進まないから少し黙れ。 それで、エヴァの食事は人が食べる物で事足りるのか？」

ギャアギャア喚くエヴァを押し留めつつ、苦笑しながら言う。

「むゝ、まあいい。食事は人と同じで問題ない。私は吸血鬼だが別に血は必要ないな。どちらかと言うと趣向品に近い」

「そうか……。その辺は俺と同じ様なものか。まあ、俺は血だけではなく全てを食べるんだがな。エヴァはその辺どうなんだ？」

「ライルは人を食べるのか……。私は食べても食おうとは思わないな……」

苦い顔をしながらそんな事を言うエヴァ。フム、体は吸血鬼だが精神はどちらかと言うと人のままなのかエヴァは。

「ふゝん、ならエヴァの前ではあまり人は食わないようにしよう。さて、そうなる森の動物でも狩って来るしかないな」

「あ、ああそうしてくれ……。って待て、そう言う事なら私も連れて行け」

「ははは、別に置いていたりはしないから安心しろ」

あまりにも心細そうな顔をしながら言うものだから思わず笑ってしまった。

「ばか！ そんな事別に心配はしていない！ それに、なんだか私の事子供扱いしていないかお前？」

「事実子供だろう？ そんななりで大人だと言われてもな……。それに事実として俺の方が年上だと思うのだが？」

エヴァの頭を撫でつけつつそう言ってやる。

「そ、それはそうなんだが……。ええい！ やめんか！ 手をどける！ それに百歳過ぎてて十年やそこら歳が離れてても変わらんわ！」

逆上したエヴァが俺の手を跳ね除けてしまう。サラサラしてて撫で心地がいいんだがなエヴァの頭……。まあ、また今度でいいか。

「それもそうか。まあ、いい。それで、結局ついてくるのか？」

「ああ、ただ飯ぐらいには成りたくないしな」

「ふふ、別にそんな事で捨てたりしないぞ。エヴァは俺がこうなつてからの始めての友なのだからな」

「ふ、ふん。私だってそうだ……。いいからもう行くぞ！」

肩で風を切るかの様な勢いで小屋を出て行ってしまふエヴァ。少しの間それを見送ったまま待っている

「おい！ 早く来い！」

「あっはははは！ なんだ、やっぱり寂しいんじゃないか。それならそうと言えよエヴァ。ほら」

そう、手を出しつつ言ってやる。

「つく！　いいから来い！」

悔しそうにしながらも俺の手を取りズンズン森の中に入って行く。

それから、適当に動物を捕り食した。　が、ココでエヴァに文句を言われた。

曰く、生きたまま食うのを止めろ。　だそうだ。　まあ、俺はこの体になってから人としての精神が殆ど死んでしまっているし、ここ百年メンド臭がつて闇に引きずり込んでの丸齧<sup>かじ</sup>りが主だったからな・・・。

仕方が無いのでエヴァが魔法で起した火で焼いて食べたが。

「まったく、エヴァのせいで要らぬ手間を・・・」

「私が悪いのか!？」

「ははは、冗談だよ。　さてと、これからどうする？　俺は特に宛てがある訳でもないからエヴァの行きたい場所で構わないぞ？」

一通りエヴァをからかう事に満足した俺は、これからの方針の相談に移った。

「はー、大分ライルの性格を掴んできたよ・・・。　行きたい所などと言われてもな・・・。　正直私は今まで生き残る為に逃げ回ってばかりだったからな・・・」

苦笑しながら言っているエヴァを見て



「そう言えばエヴァってやけに弱いよな。あんな雑魚に捕まるなんて」

ふと、疑問に思い聞く。

「わ、私は人だった時は十歳の子供だったんだ！ ライルの様に英雄だった訳じゃない！」

怒ってしまった・・・。

「まあ、俺も好き好んで英雄になった訳じゃないがな・・・。いや、どうなんだろう。ふむ、もはやアノ当時の事は色褪せて来ているな。まあ、俺の事などどうでもいい。それにしても、吸血鬼というのはそんなに弱い種族なのか？ 少なくとも魔力は結構有る様だが」

「すまない、嫌なことを言ったな」

申し訳なさそうな顔をするエヴァ。

「いや、いいんだ。昨日言ったようにその事は俺の中ではもう終わっている」

「・・・そうか。魔力については・・・。魔法を教えてくれる師などいなかったのだから持ち腐れ状態だよ。まあ、低級魔法は何とか独学で出来るのだから。それと、吸血鬼は確かに人間よりも身体能力が高いが、これも魔法と同じく力を持て余している」

しかし、十の子供が訳も分からぬまま吸血鬼にされ、あの正義バカ共に追い掛け回されている間に低級だけとは言え独学で魔法を使え

る様になるとは……。その手の才能があったのか、いや……。生き残るのに必死になって覚えたか……。そんな所も俺と似ているな。

「そうか……。では、魔法世界にでも行こうか。そこなら魔道書くらい幾らでもあるだろう」

「……。確かにそうだろうが、敵の中に進んで入って行く事にならないか？ それに、ライルが教えてくれたらどうだ？ 奴等から知識を奪えるのだろう？」

「いや……。変な期待している所悪いのだが……。俺の場合は妖精を脅しつけて人間の魔法を無理やり使っているから正確な方法として教える事は出来ないんだ。それに、魔法の知識も伝え方に齟齬が出てしまう可能性が高いからな。俺が食った人間の記憶を視るに、学術国家なる場所があるようだ。そこならば受け入れてくれるだろう。なんでも、犯罪者だろうが何だろうが知識の探求を求める者は受け入れると豪語しているらしい」

「まあ、ライルがそう言うならついて行こう。どだい私にはその手の知識が無いからな」

「エヴァは血から知識の吸出し出来ないのか？」

「いや……。そう言う事は試した事がない。さっきも言ったが、私は逃げ回るのに必死で自分の体の事についてソレほど詳しくはない」

「自分の体だろう……。さて、では伝承通り霧になったりオオカミになったり、蝙蝠になる事が出来るかどうか分からないのか

「？」

「あ、ああ。私を吸血鬼にした奴は、どこから手に入れた資料を基にやった様だったし。そもそも、あの時は吸血鬼化に伴う破壊衝動が酷くて何か聞く前に殺してしまったからな」

「ふむ……。では、その辺を確かめつつ行こう。出来るのならソレに越した事はない。力があって困る事はないからな、俺達の様な者にとっては」

「そう……。だな。所詮化け物は排除されるだけだろうしな……。生き残るには力か」

悲しそうに苦笑するエヴァ。

「ふむ……。なあ、エヴァ。俺が思うにお前は化け物になっ  
てはいない。少なくとも精神はな」

「なに？」

「だって、エヴァは進んで人を襲おうとは思ってはいないだろ？  
俺の様に自分の趣味の為に人を襲い喰らわない。なら、エヴァは  
少なくとも精神面ではまだ人間なんだ。もしかしたらそのせいで  
本来の力が出せていないのかもな」

「……。確かに、私は襲われなければ無闇矢鱈に自分から人を  
襲おうとはしないが……。関係あるのか？」

「恐らくだが……。聞いた事はないか？ 精神と体は一体だと。  
エヴァの場合は、精神に引きずられて体が必要最低限の変質に留

まっているのではないかな」

「ライルは心まで化け物だと言う事か？」

「まあな……。俺の場合はこの体になった時に、自分と他の人間が同じ存在だと思いたくなくて……。あの時は殆ど精神が死んだ状態だったんだ。それに、俺は生まれた時から姉以外には人間扱いされてなかったと言うのもあるな。まあ、俺を引き取ってくれた家ではそんな事は無かったが。少なくとも十歳程まではそんな状態だったからな。」

だから俺は、自分が人間とは違う生き物になった時、恐怖や違和感よりも安堵の方が大きかった。

ああ、これで俺はアイツ等とは違う存在になれたとな」

そう懐かしむ様に語って聞かせる。

「そうか……。なんと言ったら分からないが、英雄にも闇はあったということか……。くっはははは！ ああ、私は恥ずかしいよ。自分一人悲劇のヒロインの様に思っていたとはな……」

「まあ、この程度世の中には吐いて捨てるほどあるって事だよ。

それに、気付かないで自分だけが不幸だ。と、思ってしまうのはよくある事だよ。俺もそうだったしな。だから、エヴァ。そんなに泣きそうな顔をするな」

そう言って、エヴァを抱きしめてやる。

「な、泣いて……。なんか……」

「いいから……。今はこのままで、な」

暫くの間、エヴァの鳴咽のみが流れていく。

「す、すまない。見つとも無い所を見せたな」

目を腫らし、顔を赤くして、恥ずかしそうにしているエヴァ。

「いいさ、気にする事はない。それに、コレからは俺に頼ってくれていい。 やっと、手に入れた友だ。 今度は零さないさ・・・」

そう、今度は。 この娘だけは、守ろうと。 まだ、逢ったばかりでそんな事を思うのは・・・。

ただ、自分が必要とされている事に対する希望なのか、それとも、俺自身が今度こそちゃんと愛されて愛した者を守り抜きたいと言う願望なのか・・・。

今はまだ、はっきりとはしないがな。 こんな事を考えている俺は、やはり人としては欠陥品なのだろうな。

「安心しろライル。 私はこんな体だ。 だから簡単には死んだりしない。 お前がどんな状況で大切な者を亡くしたのかは知らないが、私は消えないよ。 それに、守ってくれるのだろうか？

だから、そんな顔をするな」

・・・ 俺はいったいどんな顔をしているのだろうか。 嘲笑か、自嘲か。 まあ、エヴァの顔を見るに碌な顔をしていないのだろう

な。

「ははは。　なんだそれは。　結局は他力本願か？」

だから、挑発するように笑ってやる。

「ふん！　人が優しくしてやれば調子に乗りよって」

だが、

「ありがとう、エヴァ。　ああ、誓おう。　君は俺が守るよ」

エヴァの目を見て、遊びの一切無い眼差しを向けながらそう誓を立てる。

「〜！　な、なんだ！　いきなり真剣になりよって！」

顔を真っ赤にしているエヴァ。

「あはははは！　まあ、いいじゃないか。　それにしても、エヴァは見かけ通り乙女だね〜。　なんだ？　出逢って間もない俺に惚れたか？」

今度は遊びたっぷりな笑顔で言う。

「だ、誰が！　っく！　精々そうやってからかってればいいだろう！　そのうちにライルの方から私に惚れたと言わせてやるさ！」

「くくくっあは、あっはははは！　それはいい。　俺にその手の趣味は無いけれど、それもまた一興か」

爆笑しつつ、エヴァを見て。　まあ、この娘は間違いなくいい女だから、そうなる可能性もあるかもな。

などと考えて

「わ　ら　う　な！　ソレに、そういう趣味とか言うな！　私だつて気にしているんだぞ！」

「ふふふ、まあ、いいじゃないか。　それはそれで、可愛いよ」

「くく！　またそうやって！」

「これは、本心だよ。　だが、惜しむらくは……。　後数年は成長した体ならば今すぐに恋に落ちていたかもな。　エヴァはソレほどの魅力がある。　外面も内面もね」

そう、エヴァは十歳で今の境遇に陥ったと言うのに、内面性においては堕ちる事無く、今だ人のままなのだ。　これは、俺などよりも人として余程強いのだろう。　だから、せめて彼女だけは清らかなままに……。　そう思ってしまうのも、仕方が無い事だろう。　それが、無理だと分かっているも……。

「も、もういい！　分かったからそれ以上言うな！　こっちが恥ずかしくなる……」

真っ赤な顔のまま捲くし立てて言いつつ最後の方は消え入る様な音量だったが、生憎と俺はその辺にいる動物よりも肉体スペックが高いのでちゃんと聞こえているぞ。

「そう、なら、エヴァを口説くのはまた今度にでもしよう。　「も

ういいと言うに！」・・・さてと、それじゃ、行こうか。目指すは魔法世界の学術国家アリアドネーだな。その道中、エヴァの能力の研究と力の制御法。それと、身体能力を十全に活かせる様に俺が戦闘方法を教えよう。魔法に関しては制御の仕方や練り方くらいしか教えられないからな」

「それはいいな・・・。私も近接戦闘が出来るようになれば例え不死殺しの武器を持った騎士がいても対抗出来そうだな。それと、やはりライルの魔法は私では使えないのか？」

「ああ。俺のは人間共が使っている魔法とは根本的に違うからな」  
「どう言う事だ？」

「人間が使う魔法は精霊の使役によるモノだが、俺のはなんと言ったらいいか・・・。俺そのモノを使って現象を起している。まあ、俺自身が精霊の様なモノだと思ってくれればいい」

「無茶苦茶だな・・・」

「それに、俺は魔法を使わなくとも強いからな」

「流石は英雄と言う事か・・・」

「いや、俺はナンにでもなれるんだ。だからドラゴンだろうと何だろうと素手で殺せる力を出す事が出来る。まあ、戦闘技能のみでも確かに雑魚相手なら殺せるがな」

「何にでもなれる・・・。それは、お前が女になってたのに関係あるのか？」



「ああ、それもあるな……。ただし、アレは……。まあ、限りなく同一人物に近い二重人格の様なものなんだがな。気分で人格が女になる時があつて、その時は女の肉体になるんだ。これは何故とか聞かれても分からないから聞かないでくれ」

「あ、ああ、分かった。その辺りは追々お互いの事を話していくしかないな」

「そうだな。ただ、俺が女の時はお気を付けてくれ。自分で言うのもなんだが、正直かなり不真面目だ……。なんと言うか……。俺を悪ガキにした感じとでも言うのか……」

「それは……。まったく同じ性格ではないにしても、お前は以前なのだから抑えられないのか？」

「無理だな。諦めてくれとしか言えん」

「昨日はそれほどでもなかったか？」

「ああ、昨日は珍しく真面目だったな……。だが、魔法使い共が出てきた辺りでアイツ等の事からかつて遊んでいただろ？ 自分で言うのもなんだが、女の俺は見てくれはいいからな」

「そう言われてみれば……」

「まあ、あんな事はしょっちゅうだな。半裸で男を誘って食い殺すとか、そんな遊びばかりに魂燃やしたりするんだ。俺はいつか貞操が失われるのではと思つてはいるんだが……」

「わ、分かった。出来る限り止めて見せよう・・・」

「ああ、よろしく頼む・・・」

せめて、貞操だけは・・・どうにか・・・。流石に元男なのに  
男とヤッタ記憶は吐き気がするからな。

## 今後の方針（後書き）

後一話までは書けているのですが、それ以降はじっくりと書いていこうと思うので連日投稿は明日で最後です。

大体の流事態は頭の中で出来ているのですが、イベントのみで話を構成すると短い上に薄っぺらくなってしまいそうなので日常辺なども挟みつつやっていこうと思います。

## 旅路

エヴァ

アレから三年ほど経った。だが、今だ魔法世界にすら入っていない。ライルが言うには、せめて私が自衛出来るようになるほどの力を手に入れてからの方がいいかららしい。

でも、私が思うにただライル（女）が、私を鍛えるのを面白がっているだけに思える。

なんて言うか・・・本当に女のライルは酷い。私達を追ってくる魔法使い共に対して色仕掛けし、油断した所を闇に引きずり込む事に命掛けてるんじゃないかと言うほど一回、一回シュチュエーションに凝っている。

それに、女の状態だとより思考が人間より離れるのか。闇に引きずり込まずそのまま食べたりもする。

初めのうちは私も吐き気を覚えていたが、何度言っても止めないのでもう諦めている。

私の修行の方だが、体術に関して言えばそこそこにまで来ているらしい。元々吸血鬼としての身体能力は高かったので後は力の使い方や静と動の振り幅をコントロールする訓練をする事により、並みの者では相手にならなくなった。魔法使い相手でも魔法を使わずに斃せる様になっている。

ただし、ライルが言うには教会の聖騎士には勝てないらしい。昔ライルが戦った者はただの人間にも拘らず、ライルと同等の身体能力を持っていたと言う。まあ、ライルが何処まで本気でやったのかは知らないが、気をつけて置く事に越した事は無いだろう。

もしも、私と同等の身体能力、剣の腕がライル並みで不死殺しでも持ってこれたら流石にやられてしまうだろうな・・・。

後、私の能力の事だが。確かに私の吸血鬼らしい所は血を吸う所と不老不死、身体能力くらいしか気付いていなかったが。ライルと共に過し、襲撃者共の血を吸っているうちにソレらしい力も発現してきた。

前にライルが言っていた『霧』『蝙蝠』『狼』それに『魅了の魔眼』はどうか使えるようになった。

霧はそのまま自身が空間に溶けて物理攻撃から身を守れる。（ただし、魔力や気の籠ったモノを避けることは出来ないらしい。これは私の力量不足なのか、元々そういうモノなのかは分からない）

『蝙蝠』は私の一部を切り離して使い魔の様に操る事が出来る。

探索様に便利だ。それと、使い魔の蝙蝠がいれば私が殺されてもソレから復活出来る。

『狼』は私自身の姿を狼に変えるそれだけの能力なのだが、どうやら全身に魔力を纏っているので臂力やスピードが尋常じゃない。正直コレだけあれば数百人程度の魔法使いなら相手出来そうだ。（ただし、狼化は一種の暴走状態なのであまり使いたいとは思えないな。ソレに、相手の血肉を喰らう度に強くなるなど魔に堕ちていく過程を味わっているようで怖い）

『魅了の魔眼』はそのままだな。目を合わせた相手を魅了させる事ができる。態々血を吸わなくても従者に出来るので便利なのだが、ライルクラスの相手ではレジストされて出来ない。

この様に私も人外街道をひた走っている。初めは怖いと思っていたが、これでライルに近づいている、傍にいれるという気持ちの方が強くなっていった。

だって、アイツときたら。自分は一人で大丈夫だろ。みたいな顔をして、時々泣きそうな眼をするものだから。ほおって置けない。

それに私を一人ぼっちの地獄の様な日々から救ってくれた。今では兄のような姉のような（男の時と女の時でギャップがありすぎるが・・・）関係になれている。

だから、今度は私がライルを救ってやらなければ。お前は一人じゃないと感じさせてやらなければいけない。

ライルは過去人の時に自分のせいで大切な者が不幸に陥っている。

その為、ある一定の線引きを私に対してしている節がある。（コレは、男の時も女の時も変わらずに）本当は大事な人を作り、抱きしめたり抱きしめて欲しいクセに・・・。

アイツは……。なんとというか、結局の話臆病者なのだろうな。

だから、私は誰にも負けないほど強くなって。守られる様な存在ではなく。ライルの隣に立てるといふ事を知らしめてやらなければならぬ。そうして、言ってやるんだ。

「ライル、お前を幸せにしてやる。私に出会えて事を感謝するがいい」とな……。

まあ、今の私ではまだ無理だがな……。

「えヴあゝ、なゝに難しい顔してんのよ？　て言うかついさっきまで百面相してたわよゝ」

こ、こいつは……。人がせっかくお前の事を真剣に考えていると言うのに……。

「ええい！　私はエヴァだ！　えヴあゝ。とか変な発音するな！　ソレに、私が難しい顔して悪いのか！？」

「別に悪くはないけれど……。ソレ持ったままそんな顔していると不気味よ……」

あ……。しまった。獲物の血を吸いながら考え事をしてしまっていたようだ。

人間の死体に牙を立てながら百面相する少女……。我ながらシユールすぎるな……。

「す、すまない。と言うか……。お前に言われたくないわ！　なんだソレは！」

「え？　食事よ？　見ればわかるじゃない。ああ、もしかしてま

た生で食べるなどか言うのかしら？」

「違うわ！　美女が人間解体しながら貪り食ってる光景は、私以上にシニールというか気味が悪いわ！」

こいつ、全身を返り血に染めながらムシヤムシヤ食べよって……。

「そうなのか」

「……なんだそれは」

「なんか、言わなくちゃいけない気がして……。　神のお告げかしら？」

「そんなお告げあるか！　神もいい迷惑だろうよ！」

「酷い……。　エヴァったら私が神如きに伺いたてなきゃいけないような者だと思ってたのね……」

「そこか！？　どれだけ自意識過剰なんだ！」

「……。　エヴァ最近性格変わった？　昔はもう少し御淑やかだったのに……」

「おまえのせいだ！」

「エヴァ！　人のせいにする様な子に育てた覚え私はないわよ！」

「育てられた覚えもないわ！」



「そんな事言うなんて……。私、泣いちゃう……」

「うっとうしいから泣き真似を止めろ！」

「ふふふ、エヴァはやっぱ難しい顔をしているよりも元気な方がいいわね」

「な、なんだ突然……」

「っ！ 結局私が元気ない様に見えたから気遣っただけか！ 自分は化け物だとか言うくせに、他の奴等（少なくとも襲ってくる奴）よりも人間らしいじゃないか……」

「まあまあ、いいじゃない♪ それじゃあ、腹ごしらえも済んだ事だし行きましょうか」

「……。移動するのはいいが、何処に行くんだ？ と言うかそろそろ魔法世界に行かないか？」

「ん」。どうしようかしらね。私としてはいいのだけど……。アイツがダメと言いそうなのよね。全く過保護なんだから」

「お前は本当に同一人物ではないのだな」

「そうね」。体の主導権は表に出ている意識だけど、別にもう片方が眠っている訳ではないし。同時進行で二つの事考えられたりして便利なのよ？」

と言う事は頭が二つで魂も二つなのか？ いや、ライルを私の常識に当てはめて考えても無駄だな……

「で、お前としてはどうするつもりなんだ？ お前の意見もあるの  
だろう？」

「そうね。・・・ どうでもいいけど。 臭いわね・・・  
豚や犬の匂いが酷いわ」

？ ああ、また来たのか。

「そうだな・・・ ここまで臭いと喰う気にもならんな」

「出てきたらどうなの？ それともコソコソしてないと女二人す  
ら相手に出来ないような玉ナシなのかしら？」

挑発の為に嘲笑するライル。 しかし、コイツはこんな馬鹿にした  
態度だというのに何故ここまで艶やかさがあるんだ・・・ 気品  
すらある様に感じられる。

「っぐ！ そんな巫山戯た態度でいられるのも今のうちだ！ 今に  
服従させてやる！」

現れた男達は下卑た笑みを隠しきれずにいる。

「ねえ、エヴァ。 こいつ等のパターン飽きない？」

「そうだな。 毎度毎度、同じ顔しかせん」

「そうよねえ。 そんな酷い顔でよくこんない女の前に出て来  
れるわ」

いや、お前が美人なのは事実だが。 今関係あるか？

「言っている！ 今日こそは正義の為————」

「もういいわ。 サヨウナラ」

男の言葉を遮り、ライルが言ったとたん男達の足元から質量を持った闇が這い出てきた捕らえた。

「な、なんだ!？」

「や、やめ————」

「ひー！」

慌て、叫び始める男達。

「無様。 その一言に尽きるわね。 ふふふ、ソウダ————」

何か思いついた様にライルが手が男達の方に向ける。

「……どうせ碌な事では無いんだろうな。」

「貴方達、私を犯すつもりでもあったのでしょうか？ なら……  
自分達が犯されなさい」

闇が蠢きだし見るも無残な化け物の形を作り、男達を喰らいながら・  
・・その……尻を……。

「って！ 止めんか！ 気色悪いモノを私に見せるな！」

「あら、本来刺すことしか考えてない様なバカを刺してやってるのよ？　こんな滑稽な処刑方法はないじゃない？」

「それでも、気色悪い事には変わらないだろ！」

「仕様が無いわね・・・」

つまらなさそうに指を鳴らして、絶望の悲鳴を上げている男達を飲み込んだ。

「ああ、不味い。　酷い味ね・・・食あたりしそう」

「全く・・・。　ライル、お前はもう少し・・・」

「きくこくえくなくいく！」

「いいから聞け！」

ギャアギャア喚きつつ私達は路地裏を離れ闇の中に消えていく。

## 旅路（後書き）

ここからはまだ書いていないので、週一くらいを目途に更新していきます。

## 闇の中の祝福

エヴァと出逢って十年程エヴァを鍛えつつ旅をし、欧州をあらかた回った後ついに魔法世界に行こうという事になり。

ブリテンの片田舎にあるらしいゲートを変装と認識障害、エヴァの魔眼で通ったり、適当な奴を喰らってこちらの世界の知識を得る。

「ライル、それで？ どう行けば目的地に着くのだ？」

エヴァも俺と共にいる事で大分こういうことに慣れてしまったな・  
・。人間は所詮我々の餌でしかない。ああ、確かに俺はそう思えるが、恐らくエヴァは無理して俺に合わせているのだろうな・  
・。

ははは、十年も一緒にいても俺達は本当の友になってはいない・  
・。エヴァはどうだか分からないが、そもそも俺は友と言える者が生涯いなかったからな。エヴァが俺を寄る辺にしてくれているのはもちろん分かっている。だが、それは依存の方が近いのだろう。  
友、兄、姉・  
・。恋人、家族。

俺達はそのどれでもあり、その実どれですらない。それが、俺の今の見識だな・  
・。

ああ、分かっている。これは俺のせいなんだろう。エヴァがどれだけ俺に愛情を注いでくれようとも俺自身がソレを得る事を拒んでいる。一方通行の思いは何にすらなれない。だがな・  
・。

こんな俺でも、お前の事を・・・。

「おい！ ライル！ 聞いているのか！」

「ん？ ああ、悪い。それで・・・行き方だったか。それなら問題はない。場所や方角は分かった」

ついつい考えこんでしまった事に苦笑しつつ答える。

「まったく・・・。それで、何を考え込んでいたんだ？」

俺がその情報を闇に入れてエヴァに渡すと、ソレを蝙蝠に入れて解き放つ。

「ん？ なに、エヴァがどれだけ可愛いのかという考察をな・・・」  
爽やかに笑いかける。

「ば、バカ者が！」

顔を真っ赤にしてソッポを向いてしまうエヴァ。

「なんだエヴァ照れる事はないじゃないか・・・。そう、アレはまだ出逢って間もない頃はよく俺の寝床にはいつ「わー！ だ、黙れ！ そ、そんな事はない！」いや、アノ頃は、俺の時も、私の時も抱きつきながら寝ていたじゃないか」

昔、俺と出逢った頃は、エヴァは若干幼児退行していたのだと思う。  
・・・いや、あれは彼女なりに一番安心出来る場所で、一番無防備な時を過したただけなのだろうか？ くくく、そうなると、だ。

あながち先ほど言っていた俺の戯言も間違いではないな。　ああ、確かに彼女は可愛い。　とても愛おしく思える。

「なにを！　したり顔でうなずいてるんだ！　久々に私はライルの血肉を喰らいたくなってきたぞ……」

幼女がとんでもない事を吹いている……。　まあ、確かに俺は……。　いや、私の時か。

面白半分でエヴァに血を与えたら軽く暴走した。　今だ俺の貞操は守られているので処女。　しかも、普通の人間などとは違い、血肉に含まれる魔力や生気が桁外れらしい。　なので、飲みだしたら止まらなくなり、終いにはオオカミ化してまで狙って来たので久々に全力で叩き伏せたな。

「止めておけエヴァ。　今のお前に全力で暴走されたら少々手間だ。　それと……言ったはずだぞ？　こちらでは俺をライルと呼ぶな」

そう、俺……。　『常闇の死』<sup>タナトス</sup>や『常闇の女神』<sup>ニユクス</sup>がライル……。　フォン・エーデンヴルグだと知っているのはエヴァとあの詐欺師だけだ。　他の奴等は実の両親だろうと何だろうと徹底的に殺した。　そして、俺自身の死体も創って斬首体で処刑場に置いて来た。

これで知っている者がいるのなら今頃イコールで繋がり正式な名で手配されているだろう。　それに、俺はエヴァと完全に二人の時以外では元の姿ではなく微妙に変えてある。　しかも、幻術などではなく肉体変化で変えているので、手配書にある顔も男や女の姿の時関係なく複数だ。



因みにエヴァもめでたく二つ名がついた。『闇の福音』だ。・・・

やはり、人間共のセンスは酷いな・・・。  
常闇と一緒にいる福音  
だからって、ただソレに闇付けるだけとか・・・。

まあこれもうでもいいか。

「分かったよタナトス。しかし、お前だけ偽名とか必要なのか？」

「いや、俺がタナトスだと知られると教会が聖騎士のトップ送りつけて来る可能性が高いからな」

「何故だ？」

「俺も元はアイツ等と同じ類の人間だったからだろう」

「同じだと・・・？　つまりお前は聖人だったと言うのか？」

聖人。それは神とかいうカスに選ばれた人間でありながら人間とは思えないような身体能力や魔力をもって生まれた奴の事らしい。

俺がそうだというのは実際の所はもはや分からないが、少なくとも俺が人間だった頃は確かに神の祝福を受けたかの如く常勝無敗の権化として国に知られていた。

コレを教会の奴等は聖人であつたと思っている。だから、俺が生きて化け物やっている事が知られれば堕ちた聖人を狩る為に本格的に攻めてくる可能性がある。

奴等がやつかいなのはその特性だろう。神聖の武装を持ち、魔を退ける為に魔法ではなくただの剣技のみで俺と張り合える所だ。

まあ、俺の闇を完全に防げないから単体で来る場合はどうにか対処出来るのだがな……。

だが、教会は今の所魔法世界側に対しては不可侵を通していているようなので大丈夫だろう……か？

「少なくとも教会の連中はそう思っている節があったな。今思えば人間だった頃矢鱈とローマ聖教が俺と会いたがっていた。まあ、国は宗教の為に確実に勝てる戦力を離そうとはしなかったがな」

「と言う事は、知られば堕ちた聖人として教会のメンツの為に全力で排除するか……」

「その可能性が高い。だから名を偽る。少なくとも此方にいる間はな。しかし……」

「どう言う事だ？ この世界は全くの別次元ではなく同じ空を持っている……。いや、天体の位置が少し違うが……」

「しかし、なんだ？」

「いや、俺もこの世界で少し調べたい事が出来た。アリアドネーに付いたらソレを調べるとしよう」

「だからソレはなんだ」

「ふ、秘密だ。エヴァは魔法学の研究をするんだろう？ まずは

それをしつかりとやれ」

したり顔でエヴァの頭を撫でる。

「・・・まあいい。では、私の蝙蝠で探索しながら行こうか」

「そうだな・・・。ふむ、なあエヴァ俺達はこの世界でどれくらいの脅威だと思われるんだろうな？」

「私が100万、ら、タナトスが500万、ニクスが800万だったはずだぞ？ 賞金は」

「・・・。ニクスの方が高いのは何故だ・・・」

「そう言われてみればそうだな・・・。お前は誰も帰さず全て殺しているのだから差が出るのはおかしいな」

まさか・・・。美人云々のどうでもいい事で差が出来ているのではないだろうな・・・。ん？

「ふふふ、私の美しさが罪なのね。この溢れるカリスマがいけないのね・・・」

つく、コイツどうでもいいところで出てきやがった。

「・・・。今お前は知らない、タナトスに変われ」

「ああん。エヴァったらそんな連れない事言って。ふふふ、でも断る！ アイツ思考が無駄に長すぎるのよ」

「お前は考えなさ過ぎだろう！」

「失礼ね。　コレでも思慮深いのよ？」

「それは、男の方が考えているからだろ！」

「そんな事無いんだけど・・・」

まあ、私は化け物らしい思考しかないからかしらね・・・。（お前は面倒くさいだけだろう・・・）

うるさいわね・・・。　いいじゃない。　貴方が考えすぎなのよ。　所詮人間如きが幾ら来ようと関係ないわ。　それに、貴方はまだ人間性を捨て切れて無い。　だから、聖人如きに手間取るのよ。

「はゝ。　もういい。　行くぞニユクス」

盛大に溜息をついて歩き始めてしまうエヴァ。

「ドイツもコイツも連れない態度ばかりで私悲しい！」

嘘泣きしながらどんどん先に行ってしまうエヴァに縋り付く。

「ええい！　やかましい！　は　な　せ！」

鬱陶しそうに私を振り解こうと暴れるエヴァ。　因みに私達の周りは薄めの闇で被っているので幾ら暴れても気付かれたりしない。　周りからはただ何も無い路地裏くらいにしか思えない。　しかも、私の闇は私が認めた者以外接近も察知も出来ない様になっているので路地裏は視認できるが、何も無いのだから近づく必要性はないと認識される。

「ああ、やっぱりエヴァは抱き心地最高ね。でも、じゃればかりでは進まないか」

「半分以上お前のせいだぞ・・・」

ここは確か、人間共の本拠地であるメガロメセンブリアだったかし  
か？（そうだ、だからあまりココで派手に動くな）　そもそも、暴  
れるつもりは無いわ。　貴方、私が本当に考え無しだと思ってい  
るんじゃないでしょうね？　（・・・。　そんな事は無い）　今の  
間何よ！？　（いいから、先に進め）

「まったく、アノ野郎いつか殴る」

「何を突然訳の分からん事を言ってるんだ・・・」

蝙蝠で探索しながら先を進んでいたエヴァが心底呆れた様な態度で  
振り返りながら言うてくる。

「だって、アイツが私の事馬鹿にするから・・・」

「どちらもお前だろうが。　そもそもどうやって殴るつもりだ？」

「分裂すればいいじゃない」

当たり前のように言い放つ。

「出来るのか？」

「さあ？　試した事ないけれど出来るんじゃない？　この体スペック

おかしいから」

その辺りどうなの？（俺も試そうとは思わなかったから知らないが恐らく出来るだろう。エヴァと出逢い、共に暮らしていく事で俺とお前が確立して来ているからな）ふん。でも、自分が二人いるなんてなんか嫌ね……。　（そうだな……。　こうやって一人でいる間はいいが、分裂したら殺し合いになりそうだ）そう？私は別に貴方の事を殺したいとは思わないけれど。

「やはり、お前等はバグだな……。　」

「酷いわね。　別になろうと思ってなった訳じゃないわ。　文句ならあの詐欺師に言ってちょうだい」

「お前を変質させた奴だったか？」

「そうよ。　しかも恩を返すまで死ぬとか勝手に言っただけじゃなかったんだから。　いつか探さないとイケないじゃない」

でも、恐らくこの世界にいるわね。　（そうだな、俺の予想が正しければだが）

「化け物にした事を恩とするとは中々の性格のようだな」

「まあ、あの時は自分で望んでしまったのだから使用が無いのだけだね」

「そうだったな……。　」

もうエヴァとは互いの大体の生い立ちやらで隠している事は無い。

闇で私とエヴァを隠しながら目的地への経路を探しつつ移動していく。

「ねえ、エヴァ。さっきから歩いて移動しているけど、貴女の蝙蝠を目的地まで飛ばせば私の闇で転移出来るわよ？」

エヴァの蝙蝠には私の闇を雑れているので、いつでもソレを辿って転移することが出来るようにしている。コレはもしもの時の為の措置だ。人間だった時に間に合わなくて家族を失った経験からいつでも逃げたりエヴァの傍に行ける様にしてある。エヴァに秘密でエヴァの影に闇を雑ぜたりもしてある。

「あ……。き、気付いていたなら言えよ!？」

普段のんびりと歩いて移動する事が多いのでエヴァは忘れていたよね。

「だから今言ったじゃない・・・」

「遅いわ!」

「エヴァ、責任転嫁はよくないわよ。そもそも、そういう知識は貴女に教えてあげているのだから自分で気付くべきよ? エヴァは優秀だけれど、どこか抜けているわよね」

エヴァの頭を幼子をあやす様に撫でる。

「! 止めろ! 子ども扱いするな!」

顔を真っ赤にして吼えるエヴァ。

「もう、そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃない。それじゃ、エヴァの蝙蝠が目的地着くまでの間適当に男でも漁りましょうか！」  
もちろん食料的な意味で。

「………。お前はアリアドネーに着いてからもそうするつもりか？」

ジト目で私を睨んでくるエヴァ。

「え？ あゝ、そうね……。流石に教えを請う身で失踪事件起す訳にもいかないか」

私としてはどうでもいいのだけど流石にエヴァが知識を収集している時にやっかい事を起す訳にもいかないか……。

「ニユクスは我慢出来るのか？」

失礼ね。私にだって忍耐くらいあるわよ。

「まあ、大丈夫じゃない？」

「まあ、お前が耐えられなくなったらタナトスの方が出てくるか……」

「エ、何その信用度の無さ」

「当たり前だ！ お前今までの町で腹を空かす度に「ヒヤッハー」



とか言って人間襲っていただろ！」

「仕様が無いじゃない。お腹が空いたら食べ物食べるのは摂理よ」

「その度に騒ぎになって魔法使い共がわんさか来て大変だったんだぞ!？」

そう言えばそうね……。あれ?もしかして私の方が賞金高いのってそのせいだったりするのかしら?

「まあいいじゃない。そのおかげで魔法の研究に役に立ったでしょう?」

襲い掛かってくる魔法使いを食べる事だけではなく拷問やエヴァの魔眼でアイツ等が持っている魔法知識を手に入れていたのだから無駄ではないと思うのだけれど。

「ぐ……。確かにそれはそうだが……。だけど態々騒ぎを起さなくても勝手に寄ってくるのだからもう少し慎重にだな」

またエヴァの説教が始まった……。でも、私は欲望に正直な性格なのだからそんな事言われても直すつもりはないんだけどね。

「はいはい。エヴァは相変わらず細かいわね。もう少し貴女もハツチャケルべきよ。今度一緒にノリで町一つ廃墟にでもしましよう♪」

「するか!」

はあ、エヴァももう少し本能で生きるべきよね。そうすれば人

間が使っている魔法に頼らなくてもいい様になると思うのだけれど。

「仕様が無いわね。 まあ、アチラについたらその時に考えましよう。 それに、どうせすんなりとは受け入れられるとも思えないからね」

「お前もそう思うか。 いくら賞金首でも受け入れるとは言っても化け物をそうそう受け入れられるとも思えん」

「そうね。 まあ、その辺は私に任せてちょうだい。 最悪脅すわ」

エヴァがやりたいと思っている事はなるべく叶えてあげたいものね。

「・・・お前が交渉するのか？ タナトスの方がいいと私は思うが」

「失礼ね。 私だってその程度出来るわ。 元々アイツと私は同じなのなもの。 英雄やっていた時に交渉事なんていくらでもあったのよ？」

「それはそうだと思うが・・・。 ニュクスの方は人の思考から離れているのだろう？ ならば男の方が向いているのではないか？」

まあ、確かに私は人間を餌くらいにしか思っていないけれど、私だってエヴァを愛しているのだからその為になる事なら人間相手でもきちんとやるわよ・・・。

「・・・私ってそんなに信用ないのかしら？ なんか悲しくなってきたわ・・・」

顔を伏せてエヴァに私悲しいんですアピールをする。

「はー、別に私とてニクスの方を信用していない訳ではないよ。  
ただ、お前の今までの行動を鑑みるとどうしてもな・・・」

私そんなに酷い事していたかしら？（お前は度々好き勝手に暴れまわってその度にエヴァに迷惑掛けていたからだろうが・・・）うるさいわね・・・。仕様が無いでしょう？それが私なんだもの。まあ、コレからはもう少し計画的に暴れるわ。（結局暴れるんだな・・・）恐らくだけど、アリアドネーにエヴァを在籍させる事が出来たとしてもMMにしられれば私達にちよっかい出そうとするでしょう？  
こういう手の出し方かは知らないけれど刺客を送る事は間違いないと思うからそいつ等を食えば一石二鳥じゃない。

「大丈夫よ。今アイツと会議して大よその方針は出したもの。（俺は了解していないぞ）・・・大丈夫よ！」

「つまりタナトスの方はお前の案に了承していないんだな？」

「どうしてばれたのかしら？」

「何年お前達といえると思っているんだ。それぞれのクセくらいは分かるさ」

ニヤリと含み笑いをするエヴァ。正直エヴァの見た目でそんな笑いされても可愛いだけなのだけど。

「ふふ、そう。私もエヴァの事はよく分かっているわよ？ 私達は変わらず貴女の事を愛しているわ。」

アイツも私も同じ存在。だけど、貴女と出逢った事で私という

個が出来た。　そういう意味では貴女は私の恩人なのかもね。　だからこそ貴女は私とアイツにとって変えがたい存在なのよ。　そして失う事を何よりも恐れている。　私達が貴女と一定以上距離を締め様としないのは自己防衛なのでしょね」

「そんな事とうの昔に気付いているさ。　だから私は強くなろうとしているんだ。　ただ私は今の自分を気に入っているからな。　心まで化け物になった私でお前達と一緒にいるというのも確かに悪くはないが、それはお前が好きな私ではないのだろう？」

「ふふ、そうね。　私はそんな貴女も見てみたい気がするけれどソレは確かに今のエヴァではないものね・・・。　でも、私達は貴女が堕ちてもそこまで嘆いたりはしないわよ？　だってそうだったとしてもエヴァはエヴァなのだから。　私達は貴女と出逢った事で目的もなくただ本能のままに喰らうだけになった存在からちゃんと生きていると感じられるようになったんだもの。　私達の存在を変えたのはあの詐欺師だけれども二度目の生を感じさせてくれたのはエヴァなのよ」

「それは私とて同じだよ。　訳も分からずに化け物にされ、追われ続ける日々から開放してくれたのはお前達だ。　そして、私は今を楽しんでいれる。　幸せを感じられているんだよ。　だから、その恩をお前達に返してやりたいと思うのは当然だろう？　私という事でお前達が幸福を感じてくれるのなら私は何時まででも一緒にいるよ。　勝手にいなくなったりはしない。　だから、ライル。　私の家族になってくれないか？」

エヴァが泣き笑いの様な顔をしながら私に言った言葉は私達がずっと待っていて、もっとも恐れていた言葉だった。　私達は家族を亡くす事を何よりも恐れている。　どうしても人間だった頃の妄念か

ら離れられない。 あんな悲惨な最期をまた繰り返してしまつたら  
と……。 でも……。

「そう……。ね。 いい加減私達も前に進むべきなのかもね……。  
。 いいわ。 貴女と出逢つた時の誓をもう一度はつきりと立てま  
しょう。 私達はもう家族を失わない。 私達はエヴァを愛してい  
る。 これは、もう随分前から変わらずに心にあった事。 エヴァ  
は私達を守る。 だから、エヴァ。 私達を愛して。 その愛を永  
劫の物にする為に私達は剣を振るうわ」

我ながら随分酷い言い回しになったと思つたけれど。 これは、偽  
らざる私の本音。 そして、だんまりを決め込んでいるアイツの本  
音でもある。 何時まででもこのままでもいいなどと思つている様な  
ヘタレの代わりに私が代弁する様な形になつたけど。 思ひは本物。  
エヴァを愛しているのはアイツだけじゃない。 アイツの擬似人  
格でしかなかった私に個を与えてくれたエヴァと家族になる。 ね  
え、こんな事を思うのはいけない事なのかしら？（……。そんな事  
はないさ。 お前が言ってくれて助かった。 俺ではこうはならな  
かつただろうしな。 だが、お前はもう完全に俺とは違う様だな。  
今がお前の誕生の時だ。 おめでとう。 そして、ありがとう）  
ふふ、こちらこそありがとう。

「っ！ ああ！ ああ！ ありがとう……。 だが、私がお前達  
を愛しているのは今更だよ……。 ずっと、ずっと。 ライルに  
出逢い。 私を地獄の様な生活から解放して、私に今の生き方を教  
えてくれた。 兄の様に接してくれたり。 姉妹の様に戯れたりし  
てくれたお前達を愛さないはずがないだろう！」

泣きながら私達をずっと愛していたと、胸にある思いを零していく  
エヴァをそっと抱きしめる。

「エヴァ。泣かないで……。せつかくの家族になれたのだから……。笑って、貴女の笑顔が私達は一番好きなのよ？」

人間だった時に姉がしてくれた様に、私達の中にある唯一と言ってもいい暖かな記憶の中で自分が安らぎを感じれた方法でエヴァを落ち着かせる。

「う、うるさい……。今だけ、今だけはこの思いのままでもいいさ  
せてくれ……」

「もう、仕方の無い娘ね……」

まあ、別に悲しくて泣いている訳ではないのだからいいかしら？

魔法世界の一都市の路地裏に張った私の闇の中で、この日新しい家族を手に入れた。

## 闇の中の祝福（後書き）

お久しぶりです。

アイディアはあるのですが、話にすると難しいものですね・・・。

この話も物凄く大変でした。正直続きをどうやって作ろうか迷いますね。

しかも、最後が微妙な終わりになってしまいましたし・・・。

後一つ、主人公の女バージョンに固有名詞を付けようと思うのですが、何がいいでしょうね？

案では、このままニクスで行くか、能力元となっているルーミアを使うか、北欧神話のフレイヤ（フライア）今の所はコレくらいです。すね。

何かいい案があれば募集します。

それから、かなり不定期連載になると思うので気長に待っていただければ幸いです。

## 独立学術都市国家アリアドネー

あの後ライルの胸の中で暫く泣いていた私も、ようやく落ち着きを取り戻した。

ライルが張った闇の中で私達の新たな関係が始まったのだ。その事をとて嬉しく。そして、これからが私の受けた恩を返すことが出来る様になる。

「す、すまなかった。見つとも無い所を見せてしまったな」

涙の後を袖口で拭き顔を上げてライルを見る。

「ふふ、いいのよ。私も泣いてしまいそうな程嬉しいもの」

聖母の様な笑みを浮かべるライル。

「なら、泣け。私ばかりが恥を曝している様でなんか気に食わない」

我ながら無茶な物言いだと思ったが、気恥ずかしさが先にたってしまい思ってもみない事を言ってしまった。

「エヴァ、いくら恥ずかしいからといって泣けはないでしょ？」

ばれてる……。まあ、十年も常に一緒にいれば互いの事などお見通しか……。



「うゝ！　わ、悪かったな！　今、私は自分の感情すらマトモに制御出来ないほど嬉しいんだ！」

自分でも顔が赤くなっているのが分かる。

「もゝ、仕様が無いわね。エヴァは・・・　そうだ。ねえ、エヴァ？　私に名をくれないかしら？　アイツがね「お前はほぼ完全に俺と違う『個我』を持った。お前は今誕生した」って言ってたからさ」  
もう一度ライルがそっと私を抱きしめながら言ってきた。

「名か・・・、ニユクスではダメなのか？」

通り名として有名で、女のライルにわりとピッタリだと思う。

「んゝ、それもよかったのだけどね。　ただ、人間に付けられた名をそのまま使うだなんて気に喰わないわ」

確かに・・・。　コイツの性格上人間は餌くらいにしか思っていないからな・・・。　しかし、そうなる・・・。　いつものコイツを連想させるモノか。

「では、ローゼでどうだ？　お前がいた国の言葉で薔薇の事だ。

花言葉は愛。　お前は恐ろしい程の美貌だしな。　そして、触れようとすればトゲが刺さり血の花が咲く。　私からの愛の言葉だよ」

男を魅了し喰い散らかして血の花を咲かせているしな。

「ローゼね。　ふふ、薔薇は美の象徴。　私にピッタリね♪」

どうやら気に入ったらしい。・・・いや、確かにお前は綺麗だが。

「なんか、さっきまでの感動が薄れてきたぞ・・・」

皮肉を言いつつ深い溜息を吐くが、私の内では今だはつきりとした温かな思いがある。

「もう、エヴァは正直じゃないわね。あら？」

仕方の無い娘ね。とでも言わんばかりの顔をしていたローゼが何かに気付いたようだ。

「どうした？ ああ、どうやら私の使い魔が目的地に着いた様だな」

アリアドネーに向けて放っていた蝙蝠から目的地に着いたと知らせが来た。ローゼも蝙蝠に混ぜた闇越しに気付いたのだろう。

「どうやらそのようね。もう少しこの時に浸っていたかったけれど、それは後からでも出来るから取り合えず行きましょうか？」

私を抱きしめた形のままだったローゼが立ち上がり向かう為闇を濃くしだした。

「それもそうだな・・・。ローゼ」

呼びかけながら手を出す。

「繋いで欲しいの？ 甘えん坊さんね」

「う、うるさい。ようやく甘えられるのだから、だまって取れ」

ローゼがしょうがないなあとても言いたげな顔をして私の手を取る。

その直後、私とローゼは深い闇の中に入り。光が見えるとそこはもう目的の場所の直傍だった。

「なんか、ぱっとしない所ね。 学術国家なんて謳ってる割に」

「独立国家、しかも大国二つと板挟みになっている現状では仕方が無いのではないか？」

「大変ねえ、人間ってのは。 所詮は欲望に従ってしか生きられない様な出来損ないの分際で、ソレに一々理由を付けなければ生きる事さえ出来ないなんて」

「誰も彼もお前の様に欲に忠実という訳にはいかないんだよ。 ライルだってそうだろう？」

「エヴァ。 本名をださないで。 私の方ならいいけどアイツの方は止めなさい」

しまった……。 やはり十年も慣れ親しんだ呼び名を急に変えるというのは難しいな。

「すまない」

「まあ、いいのだけだね。 アイツも何にびびってるんだか……。 さてと……」

ローゼが辺りを見回す。 転移した場所はアリアドネーを一望出来

る場所だ。

「エヴァ、あそこに行くわよ」

ローゼが指差している場所を見ると、武装した集団がいた。

「あれは・・・、この国の騎士団か？」

「それは行けば分かるでしょ？ いいから行くわよ」

「あっ！ 待て！ ったく。 相変わらずだな・・・」

思いついたら即行動というのがローズの時のライルの行動だったが、それは家族となっても変わらないのか・・・。

背中に羽を生やし物凄い速度で騎士団と思わしき者達の場所に向かうローゼの背を必死に追いかけてながらそんな取り留めのない事を思う。

「はーい♪ その武装集団方？ ちょっと聞きたいのだけど正直に答えてくれないかしら？ ああ、別に攻撃してきてもいいけれど・・・。 その瞬間皆殺しにするわよ？」

相変わらず人間に対しては容赦ないな・・・。 威圧だけで数百人いるあの連中を圧しているぞ・・・。

「ろ・・・ニュクス。 そんなに殺気を撒き散らしていたらそいつ等マトモに話す事すら出来ないぞ」

「エヴァー、遅いわよ♪ もう少しでこいつら食べてしまう所だっ

たわゝ」

見とれる程美しい笑顔でとんでもない事をサラツと言うな……。

「これから世話になろうとする場所で大量虐殺などするな！　アホか……」

「ぐ……。　べ、別に忘れてた訳じゃないんだからね！」

「なんだ、そのリアクションは……」

「エヴァとアイツが同時に突っ込んできたからよ！」

ああ、中からライルもそう思っていたのか……。

「それはお前が悪いんだろ……。　おい、貴様等すまなかったな。ウチの……。姉が」

「アハッ、エヴァったらゝ」

私が姉と言ったのが嬉しかったのか急に抱きついてきた。

「放せ！　お前のせいで一向に話が進まんだろうが！」

どこかに向かい行軍か何かしていたこいつ等も急に現れたたった一人の威圧で誰一人動けなくなったと思ったら、目の前で喜劇の様なやり取りをされてポカンとしているではないか！

「えゝ、エヴァの抱き心地最高なのに……」

不承不承私を放すローゼ。

「お、お前達……ま、まさか。あの『常闇の女神』と『闇の福音』  
なのか……？」

この集団の長と思わしき者が驚愕と共に聞いてくる。

「ええ、そうよ。貴方達人間にはそう呼ばれているわね。だから、無駄な事はしない方が見の為よ？私も今は貴方達を殺そうとはしないわ。まあ、攻撃されたら纏めて食べてしまふけれど……」

妖艶な笑みを浮かべながら脅しを掛けるローゼ。

「ニユクス……。お前はなんでそういう態度ばかりなのだ……。見る所こいつら女ばかりの騎士団の様だぞ？お前の趣味にはあわんだろうが……」

「ふふ、私の美貌と魅力は黙って立っているだけでも出てしまうのよ」

「いや、そんな勝ち誇った顔されても……」

「まあ、そんな事はどうでもいいわ。それより……、その貴女？貴女達はアリアドネーの騎士団でいいのかしら？」

「あ、ああ。そうだが……？」

ローゼの放つ存在感。ライルもそうだが、こいつ等は其処にただいるだけで他を圧倒する存在感がある。それは威圧や殺気を放つ時ほどではないが、慣れていない者に対してはかなりのモノだろう。

「そう、モノは相談なのだけど。私達をアリアドネーで学ばせてくれないかしら？ 聞く所によれば彼の国は他国に対して犯罪者だろうが学ぼうと言う意志のある者を受け入れると聞いているのだけど？」

「確かに……。我々はそう謳っているが、それは我々を害さない存在だけだ。貴様等の様な化け物を受け入れたらあつという間に我が国は滅んでしまうだろう」

「まあ、今までの私ならばそういう可能性もあったのだけど……。安心なさい。私の妹が貴女達の国で学びたいと言っているのよ。その間は一切貴女達の国に対して危害を加えないわ」

「信じられるものか！ 貴様等が今まで何人の人間を殺して来たと思っている！」

後ろで話を聞いていた他の騎士が認められないという意味を表示する。

「信じる信じないは貴女達の勝手だけど……。コレはお願いではなく命令なのよ。よく考えなさい。別に私はアリアドネーを滅ぼした後で学術書だけを貰っていてもいいのよ？」

「おい、ニュクス。あまりこちらで騒ぐ訳にもいかないのではなかったのか？」

「初めはそう思ってもいたのだけどね……。こいつ等、私と対等に話が出来るとでも勘違いしてくれちゃってるからね……。少し頭に來たわ」

今のローゼの姿は私と同じ金髪に、こちらは元々のこいつ等の目の色である朱だ。その姿で怒気を孕んだ眼差しを向けられた先ほどの騎士は顔を真っ青にして震えている。

そう、どう足掻いてもこいつ等では目の前にいる化け物には勝てないとは本能で分かるのだ。十年間ほぼ毎日やられていた私ですら訓練の時に向けられる殺気に抵抗するのがやっとなのだしな。

「ぐ……、すまない。先ほどの部下の無礼は詫びる。話合いを続けさせてくれ」

「貴女……、凄いわね。この威圧に耐えて話せるなんて」

「私はアリアドネー魔法騎士団の長だからな……。ついでに言えばアリアドネーでは騎士団長が国の運営をしている」

「へえ、じゃあ。貴女が納得すれば取り合えずは国で私達を受け入れて貰えると思っていいのかしら？」

「一応はそうなる。だが、国の長として言わせて貰えば少しでも害悪足り得る者を受け入れるのはやはり難しい」

「犯罪者でも受け入れると言うのはただの噂だ？」

「そうではない。そうではないが……。お前達は人を喰らうのだろうか？　そういった者達が国の中にいると分かれれば皆が混乱する。最悪アリアドネーが内側から瓦解する事にもなる」

「まあ、急に言っても信じられないかもしれないけれど。私とエ



ヴァは貴女達に教わっている間、貴女達に危害を加えない事を約束するわ。これは、元騎士である。私の誇りと剣に掛けて誓うわ」

騎士の剣や誇りと言うのは、ソレに背けば即自害をせねばいけない。少なくともアノ時代。百年戦争の時に英雄足り得た者がその剣に誓ったのだ。かなり重い意味になる。

だが、ローゼ……。お前の誓がこちらの騎士に通じるとは限らないぞ……。やはりお前は微妙に抜けてるな……。

「騎士の誓か……。いいだろう。私も騎士ならば、その誓の意味も分かる。よって、我々アリアドネーはお前達を歓迎しよう！」

な、通じた！？ 私が思っていた以上にこの女騎士は騎士道精神というものを分かっていたと言う事か。

「ならば、俺もその誓を守らねばならないだろうな。不肖の妹だが、家族が立てたモノだ」

ローゼの後ろから突然闇が噴出しライルが現れる。アイツ等本当に分離出来たんだな……。

いや、もしかしたら。ローゼと言う個我が確立した事により出来るようになったのかもしれないが。

「貴様は誰だ？」

「お前達人間には『常闇タナトスの死』と言われているな」

「やはり、『常闇の死』と『常闇の女神』は関係者だったのか・・・。  
同時に現れないから実は同一の存在なのでは？という噂もあったが・・・」

いや、同一人物なんだがな・・・。

しかし、今ははっきりと分離している。ローゼの隣に寄り添う様に立っているライル・・・。

傍から見れば兄弟と言うよりもカップルの様に見えるな。ライルも今は本来の姿に近い状態で出て来ているからローゼと似ていないし。

「それで、騎士団長殿？ 俺も込みで受け入れてもらいたいのだが？ 俺も騎士だ。約定は守る。それにあまり表には出てこない様にする。普段はニュクスの闇の中にいるからいないモノとしていい」

じゃあ、ナンデ出て来たんだ・・・。そういう思いを込めた視線をライルに向ける。

「エヴァ・・・。そんな目で見ないでくれ。何、家族が世話になるのに挨拶しない訳にもいかないと思っただけだ」

アリアドネーの騎士達に向けていた貌とは明らかに違う、言うなれば家族に対してのみに見せるべき貌で私に優しく微笑みかけてくる。

「そ、そうか・・・。お前も私を家族だと認めてくれるのだな」

「当たり前だよエヴァ。俺はもう失わない様にする覚悟を決めた。お前は俺の家族だ。愛しているよエヴァ」

こちらに近寄り、優しく抱きしめながら囁いてくるライル。

「うん、うん。私も愛している」

込み上げてくる思いからまたしても涙が溢れてくる。ライルはそんな私の顔を他の者に見せない様にする為に自らの胸の中でそっと覆う。

「あゝ、ごめんなさいね。コイツいきなり出てきて訳分からなかったことやってるけど私達の間では大事な事なのよ」

見かねたローゼが騎士団長に言う。

「いや、いい。お前達が血も涙もない連中ではないと言う事が分かったのだ。改めて、我々アリアドネーは君達を歓迎する！」

その様子を見ていた他の騎士達も、私達が真に忌むべきモノなのかこの場では判断出来ないのか。

特に表立って反対する者は出てこない。

こうして私達は独立学術都市国家アリアドネーで受け入れられる事が決まった。

## 独立学術都市国家アリアドネー（後書き）

お久しぶりです。

一応前回のアンケート？的なモノをあとがきで書いたのですが・・・。

何も来なかったので勝手に決めました！

女人格の方の名前はローゼで決定です。

意味はドイツ語で薔薇です。

まあ、花言葉的な意味ではカーネーションの方がよかったのですが語呂がよくなかったので止めました。

さて、前作を凍結して検索やランキングに乗らない様になっているのですが公開した方がいいんですかね？

要望が多ければ公開します。

さて、今回は少し戦闘を入れます？

相手は皆大好き！ 正義（笑）の魔法使い量産国家MMです。

では、また次回会いましょう。

Auf Wiedersehen

## 不破

あの日、俺達とエヴァが家族になり。

アリアドネーでの生活が始まってから二十年程経った。

初めの頃は内部からの反発も勿論あった。

が、あの時の騎士団長リゼ（正式にはリゼリアとの二十年間の信頼の証として、愛称で呼ぶ様にと言われた。 エヴァやローゼは本名で呼ぶ事をリゼに許している。

俺は申し訳ないが今だ本名は明かしていない）の当時からあった絶大な信頼とカリスマと言うべき統率力を持ってコレを沈め、エヴァの研究成果やローゼの他者を魅了する振る舞いとアイツ等の喜劇の様な姉妹のじゃれ合い（ローゼが一方的にエヴァに対してじゃれ付き、エヴァは反発するも内心では嫌がっていない様子）から少しずつだが信頼を勝ち取った。

そのリゼの尽力に答える様、エヴァは当初からの目的でもあった魔法学を驚異的な早さで習得して行き。今では教授連中相手と対等に深い話を酒の席でする程だ。（元々エヴァには戦闘行為よりもこういった研究者的な活動の方が向いていたのだろう。

独自開発した『闇の魔法』<sup>マギア・エレベア</sup>を完成させた事で研究者達からは尊敬されていたりもする。

ただし、これは名前からも分かる通り闇の素養が無ければ扱えないので残念がられてもいる。

今だ正当な後継者はいない。

また、中途半端に収めようとすれば危険を伴うので現在は禁術扱いになっている。）

俺やローゼは、あの日の近いを守り。

アリアドネー内で例え襲われても一人も殺さなかった。（襲われた場合は例に依って例の如く「正義の為に」から始まる口上を言っている間に全員意識を刈り取って拘束して騎士団に渡した）

これは幾らリゼの統率力が有ろうとも人間と言うのは度し難い程に保身や権力に固執する生き物だ。

そういった連中・・・。

この連中はMの息のかかった純粋な人間だった。

こいつ等は恐らくだが亜人族であるリゼがアリアドネーの統率官であることが気に食わなく、あわよくばその座を奪おうとしての行動だったのだろう。（その後この襲撃者達は、アリアドネーからの永久追放をされている。これは、アリアドネー内で犯罪・暗殺未遂を行った者の処分としては軽い方だろう）

また亜人族は元々自分達に危害を加えられないのであれば多種族に對して（生粋の人間以外）慣用な連中だったので、リゼを初めとする亜人族の中では初めの混乱を除けば寧ろ友好的だった。

これは古の時代、まだこの世界が亜人族や幻想種のみが暮らしていた時代に急に現れた人間達に迫害を受け。さらには故郷を追われた経験から来るモノなのだと思う。（俺はこの二十年間ローゼやエヴァとは違い表にはあまり出ずに、こういったコノ世界の歴史を調べていた。無論、家族同士での付き合いはエヴァと出会ってから十年間よりも濃い二十年になった）

こうして二十年という歳月は瞬く間に過ぎて行っただ。

俺が化け物になって百三十年、エヴァとの付き合いも三十年になる。俺達の関係も兄妹としての形が板に付いてきた。

エヴァは俺やローゼに對して心からの信頼を寄せ。

本当の兄妹に甘える様に接している。（本当にベツタリ甘えるのは

俺やローゼだけがいる場所でのみだが)

俺とローゼの関係は正直な話をすれば微妙だ。

元は自分だった者が、魂が違うとは言え兄妹として接する事はいいか？

と言う葛藤が互いにあり。また家族愛のみが俺とローゼの持つ唯一の愛情である為に自分を愛している様で少し気持ちが悪いのが原因でもある。

コレは時間のみが解決する事が出来る事だろう。

「少し・・・不味い事になった」

団長室に呼ばれた私とエヴァに向かってリゼがそう語りかけた。

「どう言う事かしら？」

着いて早々、そんな切り出され方をすれば誰でも疑問に思う。

メガロメセンブリア  
「MMが正式に、我がアリアドネーに対して抗議をして来た」

「それは、私達の事か？」

恐らく、この二十年間で追放されて来たMM寄りの人間達の事についてと。

私達をアリアドネーに匿い続けている事に対してのものだろうけど。

「そうだ、私達がアヤツ等の言う所の正義に反した行いを邪魔立てし。

滅ぼさねばならない悪の存在であるお前達を不当に匿っている事に対しての講義文が届いた」

椅子に深く座り、項垂れながら重々しく話すりぜ。

「ふんっ・・・いつかはこうなると思っていたさ。 リゼは私達に近寄りすぎた。

あの時、お前はアリアドネーの不利益になる者は受け入れる訳にはいかなと言っていたが・・・。

今が私達との縁を切るのには絶好の機会なのではないか？」

エヴァが悲しみを堪える思いを隠す様に自嘲をして言う。

「そんな事出来るものか！お前達は、私との約定通り。この二十年間、この国で一切悪さをしなかったではないか・・・。

それどころか自分達に襲い掛かった者まで殺さずにいたんだ・・・。



我々は同胞を守る為に当然の行為として、犯罪者の追放をしたままでだ！

それを後悔などしてはいないしするつもりも無い！」

机を叩き、立ち上がり。

私達を自分達の仲間だと言い。

この二十年間を間違いでは無いと大声を上げるリゼ。

「ふふ、そう言ってくれるのは嬉しいけれど・・・。

リゼ、貴女これからどうするつもり？

私達をこのまま匿い続ければ恐らく、MMは大義名分が出来たと喜び、コレを機にアリアドネーを支配する腹積もりよ？」

いつも冷静な彼女が感情を露わに私達を守ってくれ様としている事はとても嬉しいのだけれど。

このまま彼女がMMからの抗議を跳ね除ければ、私が言った通りの展開になる。

元々、MMと帝国に対する緩和剤としての役割が大きいアリアドネーには、魔法世界を全て統治下に置きたいMMにとって邪魔でしか無い存在であり大義名分が有り攻め込んでもいい条件が整えばいつでも支配するつもりだった。

「それは・・・それでも・・・私は騎士団長だ・・・ッ大国の言いなりになり、仲間を売ったとなれば。

先代の団長達に顔向けが出来ないッ！」

「だがな、リゼ。

お前の一存でこの案件に結論を出し、アリアドネーを危険に曝したとなればソレこそ歴代の騎士団長に申し開き出来なくなるのではないか？」

エヴァもリゼに対して辛辣とも取れる物言いをするのは、リゼを少なからず大切な友と思っているからこそあんな言い方になっちゃうのよね……。

「しかしッ！ 私は……、エヴァやローゼ、タナトスを大切な仲間だと……友だと思っているッ。

それを、こんな事で終わらせたくないッ！

見捨てられるものかッ！」

再び拳を机に叩きつけて、こんな事を拒絶したいという思いをぶつけるリゼ……。

「まったく……貴女もいい加減、いい年なのだから。

そんな幼子おとなしの様に駄々をこねても仕方が無いでしょう？ 私達はもう十分此処で世話になったわ……多少は嫌な事もあったけれど、それでも此処で過ごせた二十年は今まで過ぎてきた中ではとても温かい思い出になったのよ？

だから、私はリゼやこの人達からもう十分いいモノを貰えているの……。

貴女から私達に対して、友としての信義はとても有り難いけれど、私だって貴女に対しての義はあるのよ？

ここで貴女が今の意見を押し通せば私達はあの時の誓に背く事になってしまわないかしら？」

リゼが私達の事を大切な友と見てくれる……。

貴女の言葉は心地よく私の胸を打つけれど、私も貴女を友と認め、大切に思っている……。

故に温かな記憶と思い出をくれた場所に絶望の色を混ぜたくは無いのよ……。

「ッ！　だが、しかし・・・ッ」

自分が守らねばならない国と大切な友・・・。  
どちらかしか取れない現状を嘆き、苦しみに悶える様に声を漏らす  
リゼ。

私達が終わりの見えない問答をしていると・・・。

「団長！ローゼ様！エヴァンジェリン様！止めて下さい！  
何故私達に一声掛けてくれないのですか！」

「そうです！」

この様な大切な事を貴女達だけで決めないで下さい！」

私達がこの部屋に来てから外にいるのは気付いていた、このアリア  
ドネーの騎士団員達や生徒、教授連中がドアを蹴破る様な勢いで団  
長室に雪崩れ込んで来る。

「お前達・・・。

・・・我々は今大切な話し合いをしている。  
退室しなさい」

リゼが一瞬驚いた表情をするが直に公の顔になって入室してきた者  
達を諫める様に退室を促す。

「いいえ！

出て行きなどしません！

団長！我々の理念をお忘れですか！？

他国の思惑に左右される事なく、常に中立たれ。

そして、同じ学び舎にいる者を、同胞を守る事こそが我々騎士団の本懐ではないですか！

それをこの様な脅迫紛いの戯言に屈しては名折れではないですか！」

先頭にいた一人の騎士がリゼに向かって激昂し叫び掛ける。

「そんな事は分かっている！

だが、それでアリアドネー全てを危険に曝してしまう事が正しいのか私には判断出来ないのだ・・・」

「だからこそ我々に黙って大事の事柄を決めてしまおうのは如何なものですか？」

妙に回りくどい言い方をする一人の教授。

アイツはエヴァを一人の研究者として尊敬していた奴ね・・・。

「この様な大切な事だからこそ、皆で話し合うべきですよ！

ローゼ様やエヴァンジェリンさんを追い出すだなんて、そんな事認めてはダメです！」

あの娘は・・・ああ、私に妙に熱い視線を向けている生徒達の代表だったかな？

「お前達・・・。

だが、危険だぞ？本格的にMMが攻めてくればアリアドネーではそう長くはもたない。」

今私達を追い出せば当面は安泰を勝ち得るぞ？」

エヴァが自分達の為にこんなにも多くの者達が真剣に守ろうとして

くれている事に嬉し泣きしそんな顔を抑える様に、本当にそれでいいのか？と言う。

「当たり前じゃないですか・・・。  
私達は仲間なんですよ？」

「そうです。MMなどの脅しに屈して仲間を売るハズ無いですよ」

「リゼ・・・。」

後は、貴女の判断に任せるわ・・・。

正直、私達を友や仲間と見てくれている者がこんなにいるだなんて思わなかったし・・・。

まあ、どちらに転んでも私のやる事は変わらないのだからね・・・。  
家族を守る。その為に剣を振るう。決してもう溢す事はしないわ。  
ふふ、事に依ればついでにアリアドネーを守ってあげるわよ？」

家族の為に剣を振るうのは既に決定事項。

エヴァを愛し。如何なる害悪からも守り通す。決して傷付けず。愛し愛され、悠久を過す。

その過程に生じた友をついでに守ってもいいわよね？

「・・・MMには拒否の返事を出す。

皆！これから戦になる事が想定される！準備を怠るな！  
同胞を守るぞ！」

リゼが全員の顔を見て激を飛ばす。

『了解ッ！』

この場にいた全員が直に準備の為に散っていく。

「よかったのか？」

エヴァが私とりぜ、両方に別々の意味を込めて言う。

「私の意志は初めから決まっていたさ・・・。

エヴァやローズとは随分長い間酒飲み仲間だったしな。

お前達のように永遠を生きる者からすればホンの戯れの時間なのだろうが。

私からすれば大切な時間であり。

生涯の友に出逢えた喜びを汚さない為の当然の判断だよ」

既にリゼは年齢的には引退も近い。

そんな彼女が、まるで少女の様に微笑む。

「エヴァ、私も。

今はだんまり決め込んでるアイツも貴女を愛しているのよ？

なら、貴女が愛するモノを守る為に剣を振るうのは当然よ。

貴女を愛すると誓った。貴女を守ると誓った。

ならば否やはないわ」

「ありがとう」

色々な思いが縋い交ぜになり、ただ一言礼を言い静かに涙を流すエヴァ。

エヴァのすすり泣く声が温かな思いで溢れたのこ部屋にただ、ただ響く。

「いい連中だな」

私の影から闇を噴き出させてライルが現れる。

「アナタ今まで何していたのよ」

「成り行きを見守っていた。俺が出てくればせつかくの雰囲気がち壊しになるかもしれないだろう？」

確かに、コイツは私達と違ってリゼ意外にはこのアリアドネーで懇意にしている人がいないからいきなり出てくれば皆戸惑うだろうけれど・・・。

「まあ、いいわ。それで、急に出てきた理由は何かしら？」

「何、簡単な事だよ。戦になるならばそれ相応の準備をしなければならんだろう？エヴァ、感涙を流している所悪いが働いてもらうぞ」

未だ啜り泣きをしているエヴァに向い身を屈め話しかける。

「うう・・・。わ、分かった。何をすればいい？」

「これからリゼがMMに対して否を返せば大義名分が出来たと喜び勇んで攻めてくるだろう。その前にこちらの大義を魔法世界中に散蒔く」

「どういうことだ？」

「簡単な話だ。奴らが軍を動かしたと同時に前のお前の使い魔を使って魔法世界中にMMが訳の分からない事を言ってアリアドネーを攻めると噂を流せばいい。そうすれば奴等も引くに引けなくなる」

確かに、そうすればこちらも迎撃に軍を動かしても大義としては十分通る。

「ま、待ってくれ、タナトス！その様な事になればMMが本格的に軍を動かすのではないか？」

慌てた様子でリゼがライルに詰め寄る。

「—そうなって欲しいんだよ《……………》」

不敵な笑を浮かべながらリゼに返す。

「いい加減俺も人間共が我が物顔で世界に君臨している気になっている事に嫌気がして来ていた。いい機会だから知らしめるべきだろう。貴様らの卑しい欲ではどうにもならないモノがいる事をな」

どす黒い殺気を振り撒きながら嗤うライルをリゼが恐ろしいモノを見る目で見つめる。

「…………貴方、MMを滅ぼす気？」

「さあな。それは奴等次第だろう。これからはMMとアリアドネーの戦争になる。奴等が降伏すれば滅びずに済むんじゃないか？まあ、降伏勧告をする暇があればだがな。では、エヴァ頼んだぞ」



最後にエヴァを優しく抱き締めてから再び私の影に消える。

「……。ローゼ、アイツは大丈夫なのか？」

エヴァが不安そうに私を見つめる。それはそうだろう、アイツの目は狂気を孕んでいたのだから。

「安心なさいエヴァ。ただ少しアイツも怒っているのよ」

「……。怒る？」

長い付き合いの中でもアイツが怒っている所を見たことが無いエヴァは不思議そうにしている。

「ふふふ、誰だって家族を馬鹿にされれば怒るものなのでしょう？  
案外可愛い所があるのねアイツにも」

未だに自分自身の事を言っている様で落ち着かないけれど、この二十年でだいぶ慣れてきたわね。

「先程ローゼがタナトスに向いMMを滅ぼす気かと聞いていたがそのような事が可能なのか？あちらは純粋な魔法使いが数千万人はいるのだぞ？」

「可能か不可能かで言えば十分可能よ。そもそも今度のMMのチョッカイだって私一人でも事足りるのよ？それに、アイツは一度も負けた事がないのよ。どんな状況でも勝つ、それがアイツの渴望なのだから」

変質の時に願った思いは闇夜に無敵に成りたいという渴望だったけ

れど。

私が生まれたせいでアイツの渴望にヒビが入って違う物に成ろうと  
している。

未だに私もアイツも流出<sup>Atz-i-lu-th</sup>には至っていないけれどいずれはどちらか  
が至り—————

「それほどまでの力をローゼとタナトスは有しているのか？」

畏怖と驚愕が混ざった表情を浮かべるリゼ。

「そのあたりは時がくれば分かるわよ。地獄の顕現が見れるかもね。  
・・」

静かに、だが深い怒りを秘めていた先ほどのライルを見るに恐らく  
少しばかり本気を出すつもりなのだろうし。

アイツが本気を出せば人間などそれこそ塵芥でしかないのだから。

対処出来るのは私か教会の聖騎士くらい、それも上位の者くらいし  
か対応は不可能だ。

百年ほど前にやりあった騎士が序列六位と言っていたがあの時とは  
心持ちも力も違う。

あの時はただ存在しているだけだったが今は守るべき者がいて死ね  
ない理由がある。

私達の力は渴望<sup>ねがい</sup>から来る物だから心持ち次第で神に匹敵する能力に  
なる可能性があるのだし。

それに、この百年で喰らってきた者達の魂を糧に自身の力にしてい  
る私達は現段階で限りなく神に近い力を有している。カバラに出て  
くる所の創造界<sup>Briah</sup>には届いている。

己が渴望<sup>ねがい</sup>を絶対の法則として世界を侵食する行為。これは今、この世界にある魔法などとは次元が違うモノだ。  
聖人のみが出来る事、神の右座に座れる可能性のある者だけが到達できる領域。

この世界は既に破滅に向かい疾走している。流出に至る者が出た時点で世界が終わる。

世界・・・いえ、神は死にたがっているのだから・・・

## 不破（後書き）

正直、書けなさ過ぎて連載が厳しいです。

MMフルボッコは次回に持ち越しになりました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5257t/>

---

魔法先生ネギま！ 黄昏の創造主

2011年10月9日01時49分発行